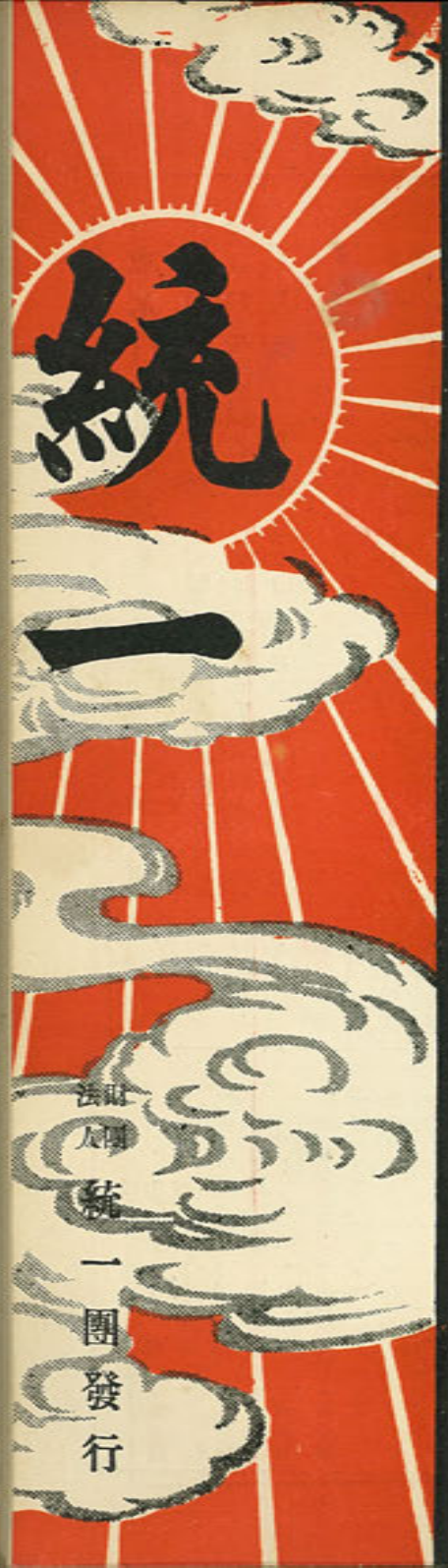


目次

聖訓摘要……日生上人
日蓮教學講座（第九回）……河合陟明
日什正師諷誦章講話（其八）……梶木顯正
法華經講話（第六講）……小林一郎
日蓮聖人（和歌）……大八木義雄
記事
○團報と教信　○寄附團費誌料頒收

第三十九年六月號

財團法人 統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢献セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ産出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一 佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　**第二** 我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　**第三** 此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　**第四** 時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　**第五** 小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　研學ノ闡達　活動ノ旺盛此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ賛同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

◎**目的**　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ規範ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎**維持員**　本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラルヽ方ヲ維持員トス

◎**賛助員**　一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラルヽ方ヲ賛助員トス

◎**正團員**　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラルヽ方ヲ正團員トス

◎**入團**　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎**誌友**　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

法華經二十重勝諸教義

日生上人

これは法華經に二十通りの勝れて居ることの箇條を擧げて御説明になつて居るのでありまして、その本は妙樂大師といふ方が法華經の卓越せる點を二十の大事と言つて書かれた、それを擧げられたのであります。傳教大師は『秀句十勝』として十箇條數へて居られるし、天親菩薩は『十無上』と言つて『法華論』の中に十箇條法華經の卓越したことをお擧げになつて居る、天台は『三十妙』と言つて三十箇條を數へられた。左樣な譯で法華經が結構なお經だといふことに就て、その内容の意味は少くとも二十箇條ぐらゐは考へて見なければならぬのであります。そこでこの御書の中にある妙樂の文を擧げてそれに就て簡單にお話しやうと思ふ。

記の四に云く、今義に依り文に附するに略して十雙あり以て異相を辨ず。一には二乘に近記を與ふ。二には如來の遠本を開く。三には隨喜は第五十の人を歎ず。四には聞益は一生補處に至る。五には

釋迦は三逆の調達を指して本師と爲す。六には文殊は八歳の龍女を以て所化と爲す。七には凡そ一句を聞くにも咸く授記を與ふ。八には經名を守護するに功量る可からず。九には品を聞て受持すれば永く女質を辭す。十には若し聞て讀誦すれば老いず死せず、十一には五種の法師は現に相似を獲十二には四安樂行は夢に銅輪に入る。十三には若し惱亂する者は頭七分に破る。十四には供養すること有る者は福十號に過ぎたり。十五には況や已今當は一代に絕たる所なり。十六には其の教法を歎するに十喩をもつて稱揚す。十七には地より涌出するを阿逸多一人をも識らず。十八には東方の蓮華をば龍尊王未だ相の本を知らず。十九には況や迹化には三千の墨點を擧ぐ。二十には本成をば五百の微塵に喩へたり。本迹の事の希なる諸教に說かずと云々。（一六六六）

これは妙樂大師の二十箇條を數へた表題を並べた言葉である。詳しく申せば法華經の內容の二十箇所の秀でた意味合といふのであるから、到底短時間で述べ盡すことは出來ない譯であるが、今は簡單に判り易くお話して置かうと思ふ。

第一の『二乘に近記を與ふ』といふのは、聲聞緣覺と稱して小乘の方から佛敎を修行して來た人のことを『二乘』といふのであるが、これが佛敎では大問題になつて、法華經より他の大乘諸經に於ても二乘は到底佛に成れないといふので、佛に成れぬ者のこれが代表人物になつて居る。丁度儒敎で申せば小人といふ言葉も同じやうに扱はれて居る。儒敎では小人を敎へて君子にする、女子と小人は養ひ難し

と言はれて居るが、佛敎ではこの二乘といふ者を問題にして、それは迚も救はれない、割れたる石は再び合はない、枯れたる木には花が咲かない、二乘は永く佛に成れないといふことで論じて來たのである所が法華經に於ては、それが枯れた木に花が咲くが如く、二乘が佛に成ることを許されたのである。これは二乘とはいふけれども實は當時の印度の人々であつて、二乘が佛に成れぬといふことになれば、即ち人が佛に成れぬことになるのである。二乘といふと遠い話のやうだけれども、詰り利己心の强い者の代表人物であるから、現代の人々は皆この二乘根性といふものが發達して居る譯である。今の所謂權利利益の主張の爲めに、今日あたりもやつて居る普選運動といふやうなことも、いろ〳〵な運動をして『よこせ〳〵』と言ふ、これ皆二乘根性の勃發といふ譯であつて、決して遠い話ではない、自分の得手勝手のやうな考の强い人間といふことである。それが法華經に依つて、表面は得手勝手の人間でも、敎を以つて導けば、皆立派な菩薩精神に化して、さうして一旦枯れたやうに見えた木にも花が咲いて出る、それが法華經の尊い所である。見捨てられた人間を救ひ上げて助けるといふことでなければ、宗敎は價値は無い譯である、これは非常に大きな問題になつて居る、それから敎の方からいふと、その二乘を貶すといふのは、小乘經に於て修行した者を指すのであるから、二乘が復活するといふ時に小乘の敎も亦共に復活して來る譯である、即ちこれが一切經の大事な問題になつて來る。その尊さはこれから段々發達して來ると思ふ、今迄のやうに『小乘はいかぬ、二乘はいかぬ』といふやうなことを言つ

てやつて居つたのは、本當は佛教が判らぬからである。小乘を捨てゝしまつたら佛樣の一々爲さつた事が皆判らなくなつてしまふ、小乘々々といふけれども、それは大きな問題である、それが法華經に依つて開顯せられて二乘が佛に成り、隨つて小乘の教がそれ〴〵復活をして來て、事實の佛教と理想の佛教が合體して、釋尊在世に日々爲さつた出來事、それが皆光輝を發するやうになつて來るのである。

第二には『如來の遠本を開く』と言つて、釋迦如來の久遠實成を現はしたのである。お釋迦樣は現身の上に於ても非常な立派な方であるけれども、その現身の奥を考へると、始め無き以前よりの本佛である、その中に有つて居られる廣大無邊の働きといふものは、實に何とも言へぬ偉らいものである。丁度如意寶珠の珠のやうなもので、表面から見れば大きさはこの位といふやうな有限の物であるけれども、之れを敲けば無限の寶を雨らすが如く、釋迦如來八十年の生滅ある身は、實は有限のものでなくして、敲けば無限の作用を現はすものである。實にお釋迦樣に就ての本當の有難さを教へたのがこの釋尊の遠本を開くといふことである。佛教を信ずる者に取つてはそこが一番大事である、親孝行の者からいへば親の有難い事、親の尊い事を本當に人が皆認めて呉れたならば、これ程嬉しい事はない。我が國民でいへば、皇室の尊嚴が彌榮えまして、豊坂のぼるといふ風に益々皇室の稜威が全世界に及ぶといふことであれば、國民に取つてこの位悦ばしい事はない譯である。釋迦の教を奉ずる者は、釋迦牟尼の本體といふものが、今云ふやうに内面より開けて、盡十方法界に釋尊の御名が輝き、光が輝くといふことにならなければならぬ。それを釋迦の教を奉ずる者の方から釋迦の頭を叩いて、段々小さくしてしまふといふやうな事は、餘程方角が違つて居る譯である、だゝしがないにも程がある。そんな者は問題にしていろ〳〵論ずるだけ野暮な話で、例へば基督教の人が寄つて集つて基督の頭を叩くといふやうな事は詰らない事である。近頃は少しは西洋にも出來て來たやうであるけれども、以前はさういふやうな者は西洋には少しもなかつた。佛教の方では餘程前からさういふ馬鹿が出て、禪宗の坊主などが言つて居る『釋迦が俺と一緒に生れたら釋迦などは叩き殺して犬に喰はしてしまふ』といふやうなことを言ふ、冗談で言ふにした所が甚だ聞き捨てにならぬ事ではないか、そんな馬鹿な事を言つて後からいろ〳〵言譯などするといふ、餘計な事である、いろ〳〵他の宗旨が言譯などをするけれども、大體出方が間違つて居る。一切經を見たなれば一言だつて釋迦如來にケチをつけるやうなことは、七千餘卷の經文の何處にも無い。私は實に感激して居るが、法華部の中の『大薩遮經』といふに說いてあるのを見ますと、尼乾子といふ沙門が非常に立派な話を段々して居る、それは妻は婆羅門の衣を着て居るが、毀燒王といふ王樣の前に於ていろ〳〵と佛法の事を論じて居る、毀燒王が言ふのに『佛法は迂遠なものだ』といふやうな事を言つたので『イヤ、さうではない、佛法に於ては政治もあれば、軍備もあれば、刑罰もあれば、人生社會の問題は何でも解釋するものである、問題があるならば問うて御覽なさい』といふので、毀燒王がいろ〳〵の事を尋ねると、實に快刀亂麻を斷つが如くに答辯を與へた。そこで毀燒王が感激して、

斯ういふえらい奴は佛法が有難いとは言ひ居るけれども、腹の中ではお釈迦様よりも俺の方がえらいと此奴は思うて居るだらうといふ事をちよつと考へた、口に出して言うた譯ではないが、『お前ぐらゐ豪い者になつたらお釈迦様はさう有難く思はないのではないか』といふやうな考へを起した。その時にこの大薩遮尼乾子が沸然として怒つた。『自分は婆羅門の衣は着て居るけれども、精神に於ては釈迦牟尼如來に絶對の尊敬を拂つて居る、それを左様な事を思はれるといふのは何事であるか、釈尊の何處に缺點があつて俺の方が釈迦如來よりえらいといふやうな自惚根性が出て來るか、餘程の馬鹿でなければそんな精神は出て來ない、何處に自分に釈迦如來よりえらい所があるか、何故さういふ侮辱をこの佛教徒に與へるか』と言つて怒つたといふ事が說いてあるが、これが本當の佛教徒であると思ふ。お釈迦様の衣を着、お釈迦様の數珠をかけ、お釈迦様のお經を讀みながら、寄つて集つてお釈迦様を貶すやうなことをやつた日本の各宗などといふものは、實にだらしの無いものである。日蓮聖人が、それは間違つた事であると言つて攻擊したのを、惡口だナンと言つて居る、馬鹿に疋をかけたやうな者が世の中には居るけれどもこの問題はそんなものではない。實に嚴肅な問題である。佛教で申したならば、お釈迦様に一點の疵でもつけるやうなことがあつてはならぬことである。有り餘る程な廣大な、德を具へながらそれを人間に適應するが爲めに縮めてお出世になつて居るのである、その內面は言ふに言はれぬ絶對無限の御德を具へ給ふといふので、『南無』と掌を合せて居る者が佛教である。壽量品に於てその意味を徹底的にお說きになつて居る。實に『一切經の中に壽量品無くば、人に魂無きが如し』と日蓮聖人の言はれた通りである、それが法華經の秀でゝ居る點の一つに數へられて居る。（次續）

日蓮聖人

大八木義雄

君か代を　昔にかへし　まつるへく
　　のりのいくさも　したまひにけむ
すめろきと　法の道との　旗しるし
　　尊とかりけり　君かいくさは
たつの口　きらめく太刀の　かけよりや
　　師のみ教は　ひろこりにけむ

日蓮教學講座（第九回）

文學士　河合陟明

★　佛は自ら大乘に住したまへり、其の所得の法の如きは定慧の力もて莊嚴し此を以て衆生を度したまふ、我は相を以て身を嚴り光明世間を照す、無量の衆に尊まれて爲に實相の印を說く、我れ本と誓願を立てゝ、一切の衆をして

★　我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき、我が昔の所願の如きは今は已に滿足しぬ、一切衆生を化して皆佛道に入らしむ。

（妙法蓮華經方便品）

第一章　佛陀の人格的諸相

第二節　佛陀の體相（一）

佛陀の讃美は佛教の一切であることに立論の根據を置いて、私は今まで先づ佛陀の恩德を讃へ來つたのであるが、これを謂はゞ總論として、これより續いて更に佛陀の人格的德性の諸方面を考察してみよう。

抑も佛陀の絕對無限を說くに當り、まづその體相を明さなかつたならば、他の功德、力用、智慧、慈悲等の說明は根據を得ることができない、從つて根據ある信仰を把住せしめることもできないのである。故に日蓮聖人は本佛の慈悲智惠を說くの前まづその體相を說き、以て迹佛權佛等（假の方便的の又は非實在的の佛）の體相を破斥せられたのである。迹佛を廢して本佛を立つるは法華經に於ける壽量顯本の勝能に屬し、而してこの勝能は妙體妙用の各方面を示すにあるも、首として先づこの體相を發揮せられてゐるのは、これ佛教經典中の眞髓なるのみならず、世界宗教中の最勝法門であるのである。聖人が自ら讃して『一切衆生の盲目を開ける功德あり』と謂ふもの眞に吾人を欺かないのである。

しかのみならず前回にも言へるが如く、我等が佛陀の恩德を受得するの結果は、はたまた佛陀への報恩行の究極は、我も亦自ら勝妙の佛身を成就するに至らねばやまぬのであるが、その成佛得道の曉に至つて果して我等は如何なる狀態に於て存在するのであらうか、我等が本佛釋尊大功德力の御加被に依つて遂に最大の靈格を顯現し、悠久不滅の大生命を體現して常樂我淨の境界なる靈山淨土に於て本佛と共に遊行する時、その自己の實在の有樣はそも〳〵如何なるものであらうか。

この我等が眞摯なる問題に對して、いさゝか本化開顯の智眼を藉り、朝な夕な我等が至心に欣求渴仰する本佛釋尊の體相を說明するならば、日蓮聖人はかの諸經諸宗に多く說ける無相の實相論、もしくは五大（地水火風空）或は六大（地水火風空識）常住論等の非人格的禪的空觀や、又は汎神觀的の見解を取らずして、まさしく微妙の相好を有したまふ、色心一具の有相尊容の人格身の佛陀を敎へられてゐるのである。もしかの汎々たる萬有神論的思想に流れて山川草木これ佛なりといひ、又は空即如來なりなどといはゞ、法華經に示されたる佛陀と衆生との

實にも温き父子親愛の情はどうして之を感受する事ができるであらうぞ。大聖人が智眼に映じたる信仰の佛陀は、開目鈔、本尊鈔等に示されたる如く、本迹觀（本地と垂迹、本體と應現）に於て、本一迹多の普現色身（普く種々の身體を現す）を說くも、その本一の佛は微妙尊形の如來である、しかも相好に即して實相と融合し、相對有限に見ゆる莊嚴の相好身に絕對法界無限の實相を具へて缺くるところがない、相好即是れ實相の佛である、しかも聖人は此の上に無始本佛論を成立し、以てそが久遠の根本的實在性を說き明されたのである。もしたゞ絕對身法界身の佛とのみ言はゞ、その中心なく、尊敬すべきものもなく、信念の依り處もなく、本迹の說何に依つて立つであらうか、隨つて法華壽量の經功を滅沒するを奈何せん、父子親愛の關係は本經の示す處、しかも宇宙萬象森羅の法界身としては、どうして此間の溫情妙趣を感得する事ができやう。されば日蓮聖人の佛陀觀はこの漠然たる佛陀觀を却け、相對身を立てゝ以て絕對身を顯し、有限性の佛陀を說いて以て無限性の佛陀を顯し、莊嚴佛を立てゝ宇宙身を顯す。これ本迹に於ける對絕（相對絕對）不二の相對身中心即ち人格の究竟的唱道であり、我が日蓮聖人が佛陀觀上特殊の着眼點にして、學者の宜しく思を潛むべき所なりとする。

由來佛敎に於ては、信仰の中心たる佛身觀に關して、敎義大いに發展し盛に論議せられたのであるが、これを整束して佛陀の德性に三方面を論じ、法身、報身、應身と稱する。應身とは慈悲を以て人界に應同して出現活動せられたる身を指し、報身とは佛陀が自己自身の覺の果報に住せらるゝ身を指し、法身とはその普遍的實在性を指すのであるが、この三身はその體一にして即一身と成つてゐるのである。なかんづく日蓮聖人は佛敎最高の宗敎思想たる法華經の哲理に基いて報應顯本の妙旨を敎へられたので

ある。即ち法華經には可憐の乙女が今まのあたりに拜する佛身を讃美して、

深く罪福の相に達して遍く十方を照したまふに、
微妙の淨き法身、相三十二を具へ八十種好を以て
用つて法身を莊嚴したまへり。

と、謳つてをり、こゝに明かに相好實在の人格的佛陀の儼存を敎へられてゐる。

今我が釋迦如來は實在不滅の法身如來に在しますと同時に、その絕對無限の身を有限の三十二相八十種好を以て莊嚴ましまして、我等を濟度せんとして今現に此處に大慈悲の隨應を示したまふ、これぞ眞善美を具足したまへる眞佛なるぞと謳ふたのである。迹門の提婆品すら尙ほこの妙義を顯はす、況んや本門の如來壽量品には久遠實成三身即一の大如來を光顯し、その大如來の秘密神通の力は竪に三世を貫き橫に十方に遍きことを闡明し、即ち時間の上には無始無終に實在不滅に在しまして而もその中心を今の釋迦牟尼とし、空間には無邊無際に遍滿應現したまふもその中心を此の娑婆世界に在りと說きたまふ、斯く無限を有限に持ち來る所は、實に大哲理を示されたのである。『有限を無限の象徵とするにあらずんば哲學の力なし』彼の禪宗の如き濫りに有限の人格を斥けて虛空の如き佛に憧憬する思想は、これを哲學の上より見ても既に舊く、抽象的實在論の思想にして、吾人より考へても虛空の如き絕對に一致するといふは決してその欲求ではない、法華經に敎ふる佛陀は、吾が人類に應生したまへる微妙莊嚴の具體的人格の佛陀それがそのまゝ實在不滅の法身佛であると明されたのであつて、これを久遠實成の本佛と稱へる、されば『歷史の生身（父母より生れた身）の佛陀』は即『敎理的實在の佛陀』である。法華經を信じないものは、釋迦佛は已に涅槃に入りて滅したまへりと思ふてをるが、法華を信ずる者は釋迦佛常に實在ましますことを確信してをるのである。『法

華經を信ぜざる人の前には釋迦佛入滅を取り、この經を信ずる者の前には滅後たりとも佛在世なり、』畢竟佛陀が印度に出誕ましましたのは、かくの如き智悲圓滿にして妙相莊嚴したまへる佛陀が實在ましまして常恒不斷に我等を守らせたまふことを現實に示す爲である。

こゝに於てか我が現前の師主佛陀は無限深遠の光明を發し來り、我等は每にその温かなる顏、尊嚴なる人格の威容を仰ぎつゝ、常恒不斷に感應の源泉、救護の中心と信受し奉るに至つた。これぞ信仰の極致、容智の至奧にして、いはゆる價値と實在との最高統一として、しかも之を絕對人格に於て認識し、以て宗教哲學の光榮ある任務を果し得たのである。これを即ち歷史的佛陀釋尊に即して超歷史的なる教理的久遠實成の本佛を開顯するの妙義と稱し、現實事實にその最高理想最深の意義根據を發揮して、神聖尊嚴なる偉大悠久性を唱道したものである。されば報應顯本とは語を換ふれば人格的佛陀の無始實在を理證したる說にして、即ち壽量品に於ける『每自作是念』の衆生救濟の大慈悲の根本體を取つて無始の實在を光顯し、而てその實在の狀態は本有の微妙尊形の人格實在を確立し、これを中心としてこれより發してその絕對の力用を論ずるときは、即ち本迹觀に於ける相對身即絕對身の意を以て、十界に亘つて應現を論じ、以てかの森羅の當相を指して直ちに本佛といふごとき思想を不徹底なりと論斷したのである。

抑も法華經の實相觀たる『事』即ち人格の無始の十界常住論に就て、九界の迷衆はしばらく措き、佛界の無始常住の色身（相好身）を尋ぬるに、妙莊嚴王品に云く、『佛身は希有にして端嚴殊特なり、第一微妙の色（からだ）を成就したまふ』と、明文本經にあり、疑ふことなかれ。無始色身常住とは吾人審美的觀念の頂點に映寫せらるゝ色相は、やがて

佛陀を髣髴せしむるに足るであらう。故に審美的思想の發展に伴ひ、無限にその色相を完成せしめんとするものである。法華の結經に云く、

世尊は十力、無畏、十八不共法、大慈大悲三念處をしまします、世間に在して色中の上色なり

此經には十方の諸佛色身滅せずと說きたまふ。

目を閉づれば則ち見、目を開けば則ち失す。

即ち微妙上色の人格的實在を敎ふるものであつて然もこの御佛をば我々は信仰の意識中には感見する事を得るも、肉眼にはまのあたり拜する事ができない、こゝに戀慕渴仰の心、恭敬尊重の想を生ず、こゝに於てか『一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まざる』の念願を發し淨行を勵むに至るのである。

日蓮聖人に於てこれを見るに、

何に況んや大覺世尊の三十二相八十種好紫磨金色の粧ひ嚴しくして、迦陵頻の御聲を以つて一切衆生を皆佛に成し給はんと、御經を說かせ給ふ慈悲深重におはします佛の御餘波惜み進らする歎き思ひ遣るに……

かの月卿雲客に勝れたる靈山淨土の行き易きにも未だ行かず、我則是父の柔軟の御姿見奉るべきをも未だ見奉らず、是誠に袂をくだし（腐）胸をこがす歎きならざらんや、暮れ行く空の雲の色有明方の月の光までも心を催す思なり。

と、されば聖人が一代奮鬪の最高潮たる彼の龍ノ口の刎頸場裡に在りて、凜乎として法弟檀越に宣せられたる『臭き頭を法華經に捧げて金色の如來と成るは、砂を以つて黃金に替へ糞を米にあきなへるが如し、これほどの悅びをば笑へかし。』との大安心の一語は、この大識見より出でたる白熱的信仰の流露告白である。即ち聖人は造次顚沛にも常に每に人格實在の佛陀を信じ、今我が人間の肉眼には不可見なるも心眼朗かに感見して昭々たる冥護を垂れたまふを

確信されたるもの、實に此の法界根本の大人格的常住者たる本佛の感應救護の確信また絶大なるものあり、されば金剛不壞の堅固決定信にあらずんば『たとひ一分のしるしはある樣なりとも天地の知る程の祈とはなるべからず』。實に龍ノ口法難に際しては熱誠壯烈大信仰の威力法界を感格し佛天に通じて霹靂雷電天地震動し、遂に首斬る能はざりしは、實にも天地の知る程の祈どこそはなつたのであつたらう。聖人自ら此の時の實感を吐露して曰く、『慈父大覺世尊替らせ給ふ』と、熱涙とめどもなき深き〳〵感謝感激の念ひを我が父本佛釋尊に捧げてをらるゝのである。

されば又曰く『日蓮が頭には大覺世尊宿らせ給へり』と、以て聖人が信念の中には常に人格的本佛の感應を景慕せられゐたるを見るべく、また佐渡雪中の慘苦を忍ぶに當つても、『如來衣を以て覆ひ給ふとはねんごろの義なり……如來と共に宿る者なり』『幸なる哉一生の内に無始の謗法を消滅せむことよ悦しい哉未だ見聞せざる教主釋尊に侍へ奉らんことよ、願はくは我を生める父母等には未だ死せざる已前に此の大善を進めん但今夢の如く寶塔品の心を得たり』との大慰藉を得られたのは、皆人格的佛陀を信賴したる信仰の機微なるを知るべきである。これを本佛釋尊人格實在の妙談と稱し、また本感應妙の教義と稱して、久遠の根本より常恒不斷に本佛の慈念感應絶ゆることあらざるを顯し、或は報應顯本、或は應身常住、或は莊嚴法身、或は法色身、或は紫金法身、或は美的法身、即ち妙色湛然として住する金剛微妙の淨法身と稱する、是れ實に眞盡し善盡し美盡せる事圓（人格的說明の圓滿）の極致なる對絶（相對絶對）不二の佛身觀にして、相相實相の玄旨は誠に即ち是である。

凡そ信仰の確立は衆生に親しき人格的實在を理想し、その救濟力の發作を信念するより來るのである

現に基督教の如きは唯一神の論證に窮せりと雖も、しかも信念を持續せる所以のものは、人類の中より神の愛を除却すれば滔々たる世間は荒涼凄慘なるものであつて、心あるものは住するに堪へないであらうと云つて、こゝに信仰を持續してゐる。今壽量の文底を探るに、三身即一の釋迦牟尼の應身實在にあり、而して法華經は、理論も實際も共に人格實在の妙旨を光顯せられてゐる。人格的實在を說かずして、山川草木悉く佛陀なり、禽獸虫魚も皆佛陀なりと云ふとも、吾人の苦は減ぜず樂をも感ぜず、漫然たる理觀を起して汎々として理的佛陀を認識するは、佛と云ふも名のみにして、何等人格の佛陀を渴仰するにあらず、たゞ知的觀念行として多少の滿足を見るに止まり、信念喚發には何の資する所なきのみならず、まさしく信念の依止處を失ふであらう。聖人が『日蓮が頭には大覺世尊替らせ給ひぬ』と云ひ、或は『臭き頭を法華經に捧げて、但今佛果に叶ひ金色の佛とならんこと如何ばかり嬉しかるべき』と云へるもの、これ皆人格的佛陀を信ずるより來つてゐるのである。苦樂昇沈を感受する吾人は、必ず人格的の佛陀を理想せずしては力ある信仰は有り得ず又起り得ず。見よ聖人は自ら『五百塵點劫よりこのかた一念も佛を忘れまします大菩薩なり』との大自覺に立つては、『我等衆生は五百塵點劫よりこのかた教主釋尊の愛子なり』と弟子を諭め勵ましし、『されば日蓮貧道（出家）の身と生れて父母の孝養心に足らず國恩を報ずべき力なし、今所頭を法華經に奉つて其の功德を父母に回向し、其の余をば弟子檀那等に分配べし』と告白せられたる、あゝ諄々たる慈訓誰か感佩せざらんや、また門弟信徒を慰めては『今生の苦みさへ苦しゝ、況んや來世の苦みをやと思召し、乃至南無妙法蓮華經と御唱へあるべし』と誡め、更に『流罪は今生の小苦なれば歎かはしからず、未來には大樂を受くべければ大いに喜ば

し大いに喜ばし』さるにつけても『この度こそは强盛の菩提心を發して退轉せじと願しぬ』と我と我身を誡め、かくて『我並に我弟子諸難ありとも疑ふ心なくば自然に佛界にいたるべし我法華經の信心を破らずして靈山にまゐりて還つてみちびけかし』との大安心大慈訓を示されたる如き、あゝこれ何れか人間情操の上に信仰を敎へられたるものでないものがあらうか、隨つて理的非人格を對象とせず、人心自然の發動を靈化し向上せしめられたのである。されば佛陀に就ても皆此の人格的有相の信仰を定むるにある、信仰は必ず有相差別の上より生ずるもの、換言すれば完全圓備の極致にある人格の實在は即ち佛陀なり。しかもこれ本有の尊形にしてこれを法界の本尊となす。前に引けるが如く法華經の龍女讃佛の偈にも『微妙の淨き法身相三十二を具へたまふ』と說いて、現見の人格的釋尊を直ちに不滅の本佛なりとし、應身即法身と見たのは、應身顯本の一證である。壽量品の佛陀は無始の活動者である、慈悲活動は應身の德用である、もし活動を認めず具體的の佛陀を信ぜざるときは、畢竟宗敎信仰の實歸なきに至らん。宗敎の活ける信仰は必ず人格的實在によりて維持せらる。聖人塞外の孤島風寒く雪積れる荒原に放たるゝや、戰慄の手を合せて『釋迦佛衣もて覆ひ給ふ、釋迦佛御手もて頭を摩で給ふ、されば今日蓮は流人なれども悅び身に餘れり』と言はれたのは、皆人格對象より來る信仰の活模範である。觀念の中に信仰を得、卓上の倫理說に道德を實行せんとするが如きは粗荒の見にして、人間を器械視したる謬見である。されば佛陀の人格實在といふ如き大事實は一に我等の眞摯熱誠なる信行に由つてこれを直證し體驗するに非ずんば、到底その秘奧の妙旨を把住しがたいであらう。こゝに體驗に據つて得る知識の途――運命に由つて啓示さるゝ眞理把握の途がある。穆々たる神秘を以て我が故鄕とする宗敎は、その上半面に於て超絕的大覺者の無上の敎權的福音に由來し、その下半面に於て之を信受する我等の心靈的體驗修行に據つてまさに之を實證し直覺せなければならぬ。理性的知識は意志的實在の註釋者である。人格的本佛の大意志力は、また唯我等の信智一如の神秘なる全人格的意志的體驗に依つてのみ此と接觸し得るのである。しかも今法華經の本門は釋迦牟尼佛を以て法界常住の活ける精神的大實在者なりとした隨つて釋尊の說法といひ慈悲といひ神力といひ、皆これ宇宙的神秘の大能から發した不磨の金言であり大悲の活動であり、無上の御稜威である。その神秘とは宇宙の神性　法界の靈能が、一大絕對人格の果德の上に發現して、そが意志化せられたる所より生じて人類救濟に用ひらるゝ不可知的靈力をいふのである。如來は微妙端嚴の尊容を以て法界に常住したまへるが、しかもこの如來の本體は神秘不可測にして法界に遍滿し、如來の大覺は無邊不思議の慧にして法界を照破し、如來の力用は自在轉變の力大にして法界の靈能を悉く捲いて受用不盡の大作用を爲すされば眞の宗敎的神秘とは、宇宙的神秘、大自然の神秘が、救濟化導の上に意義と生命と力とを具して發揚せられたものであらねばならぬ。あゝ『如來秘密神通之力』とは誠に是なるかな……夫れすでに法界に一大常住の人格的實在者の儼存を確信する――無窮なる大慈悲の救濟と不可思議なる神秘的能力とを肯定せざるを得ない――この大慈悲この大神秘の確信肯定から日蓮聖人の大人格は生れ出でたのである。我々は實に日蓮聖人が一代六十一年奮鬪忍難の壯烈なる體驗を貫いて、身を以て本佛實在の大事實を活示し嚴訓し實證せられたる事を深く〳〵感謝感激せなければならぬ。

現在眼前に證據あらんする人の事を說かば此經を信ずる人も有るべし。

聖人が本佛光顯の使命を荷へる――豫言せられたる

聖者上行菩薩の應生として、我等に示し我等に遺しまた與へられたる賜は眞に絶大ではないか。

我が法一度び出でゝ後は、正法・像法（佛滅後二千年間をいひ、それ以後を末法といふ）に諸の論師人師智者學匠の立て始めし說は、皆日出でゝ後の星の光、巧みの後に擒きを知るなるべし。

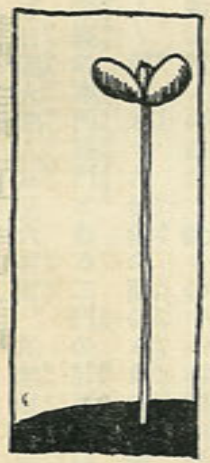
日蓮が慈悲廣大ならば南無妙法蓮華經は末法萬年の外未來までも流るべし、日本國の一切衆生の盲目を開ける功德あり、無間地獄の道を塞ぎぬ、此功德は傳敎・天台にも超え龍樹・迦葉にも勝れたり極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか。

日蓮は一閻浮提（全世界）第一の法華經の行者也。我々は實に日蓮聖人の啻に深遠なる敎理的證明のみならず、その自らの澄澈たる體驗的實證に據つて我々も亦本佛釋尊の儼存實在を確信肯定するのである南無妙法蓮華經。

誠に是の如く本佛釋尊は三世常恒衆生濟度の大活動者であり、大神通者であり、大救護者である、儼妙の尊形を以て實在したまへる大莊嚴者である、大恩德の主であり師であり親である、いはゆる主師親三德有緣の久遠實成の大恩敎主にまします、されば妙法華經には

我れ常に此に住すれども、諸の神通力を以て、顚倒の衆生をして近しと雖も而も見えざらしむ。

と、しかも我等の信念一たび至らば直ちにこれと接觸し得るのである、たとひ千萬里の遠きにも信念力は忽ちに到達することができる、一念我が心に信を感じたる時は、これ既に本佛が應を垂れたまうた時である、內外の因緣醇熟せば感應即時に成ぜんこと『月下り下らず水上り上らず、一月普く萬水に影を浮ぶるが如し』たとひ如何なる發心の場合と雖もその發心の勝緣は即ち如來秘密の妙作にして、いはゆる本佛不思議の神通に由るのである。步々念々時々刻々　時を選ばず處を撰ばず、されば如來神力品には『即是道場』といつて、即ち『若しは園の中に於ても、若しは林の中に於ても、若しは樹の下に於ても、若しは僧坊に於ても、若しは白衣の舍（在家）にても、若しは殿堂に在つても、若しは山谷曠野にても』我等一念の信仰を起す時は直ちに佛の感應あることを說かれてゐる、『佛子此の地に住すれば則ち是れ佛受用したまふ』いはゆる『暮れ行く空の雲の色有明方の月の光』でも心を催す思なり』。



あゝ人格實在の根本義に根ざせる宗敎的審美の情操この美はしき宇宙的情操の發露こそ澄澈として生氣ある我が日蓮主義の妙信仰である。

法華經を信ぜざる人の前には釋迦佛入滅を取り此經を信ずる者の前には滅後たりとも佛在世なり。佛の入滅は既に二千餘年を經たり、然りと雖も法華經を信ずる者の許に佛の音聲を留めて時々刻々念々に我死せざる由を聞かしめ給ふ。

南無妙法蓮華經　（續）

日什正師諷誦章講話（其八）

梶木顯正

十七、題目釋ヲ結ス

次ニ題目者、界如三千之本名、三身果滿之內證、本迹兩門之肝要、先師弘通之本經也

この段は上に縷々述べ來つた所の題目の意味を結釋なさるのである。『題目』とは上に出すが如く法華經の要法妙法蓮華經の五字を指す。『界如』の界とは上に擧げた十界、如とは法華經の明す十如即ち相。性。體。力。作。因。緣。果。報。本末究竟等の十を云ふ、（以上の十如は因果の二法を學理的に分解したもの）『三千』とは之の十如は十界の各々に本來具足して居るもので、然かもその十界は三世間と云つて（三世間とは三つに差別せられて居ると云ふことである即ち人間とか畜生とかに分れて居る、それが五陰世間である、それには仲間がある、それが衆生世間である、さうして各々その住家がある、それが國土世間と云ふことである。）各々惑業（惑とは煩惱を指す、業とは造作即ち生活を云ふ。）と云ふものに依つて造り與へられる境涯がある、例へば人間があれば必ずその住ふ國土世界と云ふものがある、其の人間なり國土なりと云ふものは又何等かの材料から出來上つて居る、と云つた樣なものである。で之等の種々なるものが互ひに十界個々の上に互ひに交渉し結び合つて活動て居るのが宇宙萬法の相で、それを數字的に言ひ表したのが一念三千論である。今それを縮めて御開山は三千と呼ばれるのである。妙法五字の題目を哲理的に云へば（その內容は非常に多含的であるが）之等のものを一言に言ひ表はした本名即ち（先きに出す都名に同じ）名である、と云ふ。『三身果滿之內證』とある三身とは（上に出す）果滿とは果上にある圓滿完全といふことで久遠絕對の本佛釋迦如來を指す、內證とは上にも出す如く內に持つて居る證りと云ふことであつて、我が教壇では事體理德と云ふのが特色であつて、題目は何時でも佛陀觀に對しては事體たる如來が如來の理德として內藏し給ふ證りの法だと說くので今御開山は其處をお仰るのである。此の點は尤も注意を要する所で前來シバ〳〵述べ來つた法佛の關係本尊の問題は此處へ來て一切氷釋した譯である。『本迹兩門之肝要』とて法華經の本門迹門とある二門の肝要とは要法といふ所からお仰るのである。『先師』とは御開山からすれば日蓮大聖人及び六老僧、九老僧と云ふ方々に當る譯である。『弘通之本經』とは題目は日蓮大聖人及び先輩の方々が不自惜身命で御弘通になつた根本中心の經法だとの謂である。

第六章

一、率都婆ヲ釋ス

次ニ率都婆者、本極法身之普門示現、三身周遍之三摩耶形也

この『率都婆者』とは率塔婆とも書き、略して塔婆とも書く。佛敎では『塔を建て供養す』とあつて精靈を祀つてその冥福を祈る爲に建てる意を本義とする、故に今日本堂を建てるとか、五重の塔を建てるとかいふのは此の精神を顯したものであるが、後には段々略式になつて木で一本の塔の形を作つて祀る意味を文字に現はして置く樣なことにして了つたのである。之の塔婆の形を中には哲學的に地水火風空の五輪五大から取つたものだと云ふ人もあるが、餘り當にした說でもあるまい。『本極法身』とは根本本體と云ふことで、本佛如來の御身體と云ふ意味である。『普門示現』とは生きとし生ける一切衆生の上に働きかけて御座る如來のお姿を示し現はしたものであるとの意。『三身周遍』とは三身は上に出す如く大慈大悲の根本本地の如來、濟度の爲に假りに姿を現し給ふ迹の佛、又は十方の世界に救ひの手として無數に出現し給ふ諸佛等が、過去、現在、未來の三世に亘つて周遍即ち敎化救濟の功德を遍ねく惠み施し給ふことを云ふ。『三摩耶形』とは梵語であつて印像と云ふ即ちシルシの意味で、委しくは佛

樣が大慈大悲を以つて一切衆生を救ふてやらうと、本願力の故に吾等の前に寶塔に乘つてお現はれになる。そのお像形ちを表はしたものだ、との意である。

つまり佛敎では佛樣に塔を造立して奉る事を功德とするが故に、今はその義を取つて愛弟子日妙上人の爲に御開山が造られた率都婆に就て、其の意義內容を會解き遊ばされたのである。

二、佛道ノ決定ヲ明ス

佛力法力合力、尊靈ノ增進無疑。若然者、日妙上人酬一乘所修之惠業者、開一實菩提之覺花答題目五字之勝業者、詠五智圓滿ノ之覺月

この御文は如來の本願力と妙法蓮華經の本濟力と吾等衆生の信念力と此の三力が合成して感應道交し尊靈即ち志す所の精靈は必ず佛果を成就することを御明しになつた一段である。然るに現代人は餘りにも科學的に流れ過ぎて居る爲に、今一つは何等宗敎的體驗を持つて居ないが爲に、眼に直接見えない處の精神的境涯の如きは自己の小さな獨斷を以つて否定して了ふとさへして居る。故に斯樣な連中は宗敎は凡て迷信であるとさへ云ふに至るのである。今御開山は御自身の熱烈なる信仰を捧げ給ふて、佛道

修行の善根功德は決定して御加護のあることを確信し給ひ『一乘』即ち一乘法華の經王を上に擧ぐるが如く書寫し奉り、讀誦し奉つて『所修之惠業』とは修行し奉つた善根功德の行を云ふ。即ち我等が信行し奉る熱願の力に、如來の本願慈悲力と、敎法の濟度力が加はつて心願を滿足せしめ給ふをいふ。『開二一實菩提之覺花一』即ち法華一實の菩提を開かしめ、『答二題目五字之勝業一』と云ふ題目の五字は前に擧ぐる通り、勝業とは惠業と云ふ言葉に對した句で最勝の修行と云ふことを指す。答とは報ひてはの意『詠二五智圓滿之覺月一』と云ふ五智とは一ッは如來の宇宙法界を御覽になる清き御智惠、二ッは如來の本來持ち給ふ御智惠の淸く正しいこと、三は三世を一貫して見通しになる御智惠、四ッには一切の衆生を慈悲眼の中に御覽になる御智惠、五ッには如何なる事をも完全に成就し給ふ御智惠の五ッを云ふ。圓滿とは具足し給ふ相を指す即ち如來の境涯を現はされたものである。詠すとは前の覺花と云ふに對して、覺月と成佛のことを云はれたから、對句の上から眺め詠すると遊ばされたのである。今日妙上人の尊靈も法華一實の經王を讀誦し信唱して捧げ奉つた法味功德に因つて、佛の圓滿なる五智を得給ふて必ず成佛を遂げ給ふであらうと仰せられるのである。

三、佛道ノ回向ハ現當ノ二世ト有無ノ兩緣ニ通ズルヲ明ス

七世ノ師恩、生生父母、親疎有緣、過現檀越、普灑二法雨一同。

成二妙因一、及以二法界平等利益

佛敎の回向供養に對する立前は即ち親疎一切の衆生に及ぼさんとするにある。彼の佛弟子目連尊者が母の靑提女を救はんとする時に如來の敎誡は『汝の母を救はんとならば、他の一切の苦しみ惱める衆生を救ふべし』とある。即ち他の苦惱に悶えて居る、人々を救ふて其の功德を集めて以つて母の救はれ給ふ善根に供へよとの意である。法華經には『願くば此功德を以つて普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん』とある御開山聖人はその意を前に述べ給ふのである。『七世師恩』とは今我が身が持つ所の敎が貴とければ貴い程、お師匠樣の御恩は深く高いのであるから八世も十世もその御恩は忘れてはならぬ。との意を文章字句のアヤから七生とモヂッテ七世と遊ばしたので、『生生父母』とは有り難い佛法、遇ひ難き佛樣に遇ひ奉ることを得る身を生み給ふた父母の御恩は亦之れよりも深いが故にお仰しやる、『親疎有緣』とはそれに繫がる親は近くしたしひ者、疎は親の反對の者の意で、共に親しい者も、うとき者も緣有る者であるならば、と云ふこと、俗に『袖すり合ふも多少の緣』の氣持ちである。『過現檀越』とは過ぎ去つた過去或は現在に佛法を護り僧を供養して呉れた檀越とは檀家信徒の意、『普灑二法雨一』とて上に擧ぐる一切有緣の人々の上に法雨即ち功德の雨、如來の惠みの雨をそゝぎかけて、『同成二妙因一』とて妙法華經に因つて救はれる因緣を作り成さしめたい、との御開山樣の厚い御心を

明し給ふたところである。『及以法界平等利益』とは更にその上に宇宙法界の萬靈にも平等に利益を與へしめ給へと念じ給ふのである。眞にこのお委こそ佛者の取るべき相でなくてはならない。

四、佛天三寶ノ御冥助ヲ乞フヲ明ス

便鳴二三下之少鏡一、式驚二三身之尊聞一

『三下』とは文意より見て三度び鐘を打ち鳴すことを云ふ、『少鏡』とは鏡は鐘の字の書き誤りであらうと思はれるが、佛敎では修法勤行の場合前後に必ず鐘を打ち鳴す法規になつて居るからそれを指して云ふ。『式』とは法式に從つて禮を行ふ意、『驚二三身之尊聞一』といふ三身とは久遠本佛を始めとして、造佛及び十方分身の諸佛等三世の佛天三寶を勤請し、御寶前に勤修し奉る法要の趣旨を言上して、何卒慈みを垂れ給ふて願意を聞こし召し、御冥助を給へと至心に祈請し奉ることを尊聞驚と仰せらるゝのである。

五、總　結

仍諷誦所請如件　敬白

此文は本文全體の結びで、『諷誦』とは初めに云ふが如くで本章一卷を指す。『所請』とは以上細々と述べ連らねて來た處の志趣をいふ、『如件』とは如上敬んで申上げました『くだりの通』で御座いますの意、『敬白』とは最初に云つたからこゝには略す。

嘉慶二年八月二十一日

大法主日什　敬白

この年號は人皇第百一代、後小松天皇の御時で、日妙上人の入寂は嘉慶元年八月廿七日、大法主とは、三位以上の位ある人を云ふ、御開山聖人は二位の位を持つてお居でになる方であるから斯くお認めになつたものと拜する。

今稿を終るに當つて一言すれば、一體文章と云ふものには、修辭の關係、對句の關係等があつて、文字章句の字義其まゝを取ると無理が出來る箇所も有る樣に、想はれたので、成る可く予は意を取るやうにしたのである。完全なものでは無いが信仰決定の上に緣ともなれば誠に喜びである。（終了）

謹告

皆様かねての御宿望であつた　小林一郎先生の法華經講話、第一輯として、今回お目にかけることが出來るやうになりました、頁數も百七十位で手頃と存じます是非御高評願ひたいものです。

法華經講話　第一輯　自第一講至第六講　普及版

一部　金五拾錢　送料　金六錢

申込所　東京市小石川區音羽町六丁目（電停前）
日蓮主義　統一會館
電話牛込五三三六番

○振替は統一圖口座東京九四二〇番

法華經講話（第六講）

妙法蓮華經序品第一（承前）

文學士　小林一郎

前講は、お釈迦様が無量義經を說かれて後に三昧に入られた、その場合に大勢の衆が、未曾有なることを得て、たいへん有難いやうな心持をもつて佛を仰ぎみて居つた、といふ所を讀んで居りました。そこに集まつたいろ〳〵な衆の種類が書きならべてあります。それは世の中のあらゆる生命のあるものを殘らず網羅して居るのだ、といふことを申上げましたが、その中に『轉輪聖王』といふことがありますこれは非常に意味のあることばでありますから、この機會にお話して置きたいと思ひます。尤もこゝに書いてあるのは、そんな深い意味ではないので、非常に勢力のある王様といふクライな意味で書かれて居るのでありますすけれども、一體轉輪聖王といふ思想は、印度には隨分舊くから發達した思想であります。それは日本などから考へると實に不思議に思はれるクライでありますすけれども、印度といふ國は、昔から、國全體が統一された場合は一度もない、小さい國が分立して居りました。ですから王といつたところが、日本の昔の大名クライなものです。お釈迦様のお生れになつた迦毘羅といふ國でも、傳ふる所に依れば五百餘方里だといつて居りますから、チョウド日本の少し大きい縣と匹敵するクライなもの

で、王様の子といつたところで、日本から考へれば縣知事の息子クライなものです。それで彼の國は昔から一度も統一された事がない。ヒマラヤ山の南の方の中印度地方でさへも、王國が十一か十二か分れて居つたといふことであります。チョット日本人から考へると不思議なやうに思ひますけれども、さういふ事情でズッと國が本當に平和ではなかつた。その小さい國と國の間にいつでも面倒な爭ひがあつて非常に德の勝れた王様だといつても、それを統一することは出來なかつた狀態でありました。

しかし世の中がそんなに物騷であるといふ事は、誰だつて好きな者はありませんから、自然に斯ういふ轉輪聖王といふやうな理想が出來たのであります誰か偉い王様が出たならばこれ等の各地方を統一して、その一人の王様で治める人がありさうなものだといふ希望を皆がおこして、それで今に轉輪聖王が出て來るだらうといふ事を、誰が言ひ出したかわからないけれども、永い間に言ひ出し、又言ひ傳へたそれで此の轉輪聖王といふ一種の考が出來上つたのであります。

それはどんな考であるかといふと、非常に德の高い、何處から見ても申分のないやうな偉い王様が出るといふと、その王様を天の神様が守護つて、その王様の世の中に於ける活動を天が助けるといふことを考へました。それでさういふやうな偉い王様が出たときには、輪寶といふものをその王様が天より授けられると考へた。輪寶といふのは何と言つたらよろしいか、車の輪のやうなものが五つか六つあつまつて出來て居る、一種の寶です。よく輪などにありますす山伏が突いて歩く錫杖といふものゝ頭のやうな形のものです。さういふものを天より授けられるといふことを、誰が言ひ出したか知らんけれども考へ出しました。その輪寶が授けられる形は、いろ〳〵ある。例へば朝起きて見ると、庭の樹の間に非

常に光る物がある、そこを探ねて行つたら輪寶が懸つて居つた、といふやうな話があつたり、或は地面の間から光が射して居るから、そこを掘つて見たら輪寶があつた、といふやうな話があつたり、いろ〳〵昔のことでありますから神秘的の話もありますが、兎に角天より輪寶を授けられる、その輪寶を授けられた王様は、天によつて守護られる王様であるから、その王様が行きさへすれば、モウ何人もこれに抵抗することは出來ないで、その地方がみな治まるといふ言ひ傳へであります。これは一種の神話ですから事實あつたことではない、昔の人の理想をさういふ物語にして經め上げたものであります。斯ういふ言ひ傳へがありました、ところがそんなものは實際印度には出やしない。たゞ昔の人が夢のやうにさういふ事を考へて、又理想としてさういふ事を描いて見たのでありますすけれども、お釋迦様當時から今日にいたるまで、一度もそんな人は印度に出やしないのであります。

それで佛教が支那を經て日本に傳はりました時に日本の佛教を弘める人々が、經典の中にある轉輪聖王、所謂天によつて輪寶を與へられて、その威德に依つてすべての國を歸伏させるといふやうな王様は、印度には無かつた、支那にも無かつた、これは日本に來て初めて轉輪聖王なるものが出現するのであらう、といふやうな考を發したわけであります此の事は今はその位にして置きます。他日また日蓮聖人の事を申上げる時にモウ少し詳しく申しますが日本ではじめてさういふ事が考へられた。印度にも支那にもそんな王様はありはしない。偉い王様が出たといつても、又他の王様が出て來れば負けてしまつて、とても世界を統一するどころではない、自分の近邊だけも統一が出來ない。これは日本の皇室であつてはじめて此の經に在るやうな轉輪聖王の理想を實現されることが出來るであらう、といふことを

考へまして、有名な傳教大師の如きは、此の國柄と佛教の教理とを比べ合せて、はじめて此の日本が世界で一番大きい國であるといふので、『大日本』といふことを書いた、といふ事實もあるのであります。此の事はまた他の場合にモウ少し詳しく申上げたいと思ひますが、大體轉輪聖王といふ思想はさういふ思想であります。

今この序品に書かれてある所では、それほどに深く考へないでも宜しいので、『小王』とあつてその次に「轉輪聖王」とありますから、大きな國の偉い王様といふ位の意味に解して置けばよろしい。けれどもその語が出ましたから、序に一通りのことを申上げたのであります。

さういふやうな王様とか、その他いろ〳〵の種類のものが其の座に列つて居りまして、その大勢の人々が、未だ曾て感じないやうな非常に有難い、尊いといふやうな氣分をおこして、歡喜合掌して一心に

三二

佛を觀上げて居つたといふのであります。

爾の時に佛、眉間白毫相の光を放ちて東方萬八千の世界を照したまふに、周徧せざること靡し。

（爾時佛放二眉間白毫相光一照二東方萬八千世界一靡レ不二周徧一）

「白毫」といふことは、佛教の興る前から、印度の舊い時代からの傳說でありまして、德の非常に勝れた人には三十二相が具はるといふことを信ぜられて居る。白毫といふのは其の三十二相の一つです、これは佛教に始まつたことではない、印度の昔からさういふ事が信ぜられて居たのです。といふのは、人間の心持はかならず其の相に表はれるものだといふ考です、つまり優しい心持があれば相に優しさが現はれるし、邪見な心持であれば顏つき身つきにも何だか邪見らしい樣子が現はれる。これは吾々が毎日の經驗の上でも判つて居ることでありますが、さういふやうな思想を本にしまして、本當に德が具はつて居る申分の無いやうな立派な人が出れば、その心持が自からその相かたちに現はれて、すがたを見たゞけで、人が有難いと思ふやうな心持をおこす、といふ考から、その理想的な身の形を三十二相といふのであります。頭の恰好は斯ういふのが一番良いとか、耳は斯ういふのが良いとか、手つきはどうだとか、肩の恰好はどうだとか、三十二に分けてあります。これは一々細かく申しませんが、私の知つて居る者で、西洋の骨相學をやつて居る者がありますが、その者に、今の三十二相の話をしたら、たいへん興味を持つて、それを詳しく書いて呉れと申しますから、私が詳しく書いてやつた。これを西洋の骨相學と合せてみたら、スッカリ合ふさうです、やはり非常に理想的の條件だといふことであります。ですからあまり妄說ではないかも知れません。しかしあまり詳しく言はない方が宜いでせう、及第した人は氣持が良いけれども、落第した人は何だか氣持を惡くするから……。今申すやうに、心持が良ければ自然それが相に現はれる、所謂人相が良くなるといふことは事實でありますから、全然根據の無いことではないやうであります。

その三十二相といふ中に白毫といふのがある。額の中央に白い毫が生えて、その白い毫が右に旋轉いて居るといふ、よく佛樣の像などにあります、遠くから見ると白いほくろか何かのやうに見えるのでせう、それを白毫相といふのであります。實際額の中央にそんなものがあつたら變なものですけれども、しかしその白いといふ事、或は又右に旋轉いて居るといふやうな事は意味があるので、白いといふのは智慧の明かなことを表はして居る。これは、この後もいろ〳〵な例が出て來ますが、大體に於て白いといふことは智慧の象徵です、それから右に旋轉いて居るといふことは、斯ういふ風に考へられて居る。

左――理

右――智

左といふのは理を意味し、右といふのは智を意味する、これはやはり佛教の興る前から、印度の古代からの大體の思想です。理といふのは道理、智といふのはその道理を運用するはたらきです。だから、白い毫が右の方に旋轉いて居るといふのは一切衆生を救ふべきところの勝れた智慧を具へて居る、といふ意味になるわけです。左とか右といふことはこれから後にも出て來ます。佛樣が戸を開くときに右の手で開いたとかいふやうな話も出て來ますが、いつでも左は理といふ道理の方、右は智といふその道理を運用するはたらきの方といふ意味になつて居ります。

それで眉間の白毫相といふのは、佛樣の一切衆生をお救ひになるその智慧のはたらきを形に表はしたものだと言へる。さういふやうに文字を文字通りに解釋しないで、その内に含まれた意味を理解して

讀みますと、經典といふものは非常に面白く讀めるたゞ文字だけで見ると何だか夢物語みたいで、とてもありさうもない事がむやみに並べてあるやうに思ふけれども、そこには内に含まれた意味がありますから成べくその意味を理解して讀むやうにしたいと思ひます。

その佛の眉間に在る白毫から光が出て、その光がひろく世界を照したといふことはどういふ意味かといふと、佛の智慧によつて吾等に本當の人生を理解するところの考が與へられて、その光の内に照されて世界中のものが見えたといふことは、吾等の心の迷がなくなつて、心の智慧が開けるといふと、一切のものゝ本當の相を見ることができる。斯ういふ風に解すればよろしい。吾等は心が迷つて居る煩惱でもつて心を覆はれて居るものだから、物を見ても本當に見えない、物を聽いても本當に聽えない。ところが佛の教に歸依して、佛の智慧を吾々の心に受

け入れてさうして迷がなくなるといふと、その時にはじめて一切の物の眞實の相が見える、眞實の聲が聞えるのであります。

人間といふものはどうも我儘なもので、天氣を見ても本當に見えない。大分空が曇つて來て、いやに陽氣が生温かくて、多分明日あたりは降るだらうと思はれる。ところが明日遠足をしようと思つて支度をして居る人などは『何だか西の方が明るいから大丈夫だらう』ナンと言つて居る、どうも本當の事を言へない。自分が晴れたら宜いと思ふと、晴れさうに見える。自分が降つたら宜いと思ふと、降りさうに見える。天氣一つでもなか〳〵眞實には見えない、みな煩惱に依つて覆はれて居る。その煩惱を除つて見なければ、すべての物を本當に見ることは出來ない、眼が曇つて居る耳が塞がれて居る、眞實に見ること、聞くことが出來ない。本當に煩惱がなくなつて、佛の智慧が吾々〳〵の心と通つたときに、はじめて世の中の一切の物の相が在る通りに吾等の心に映つて來る。それを『諸法の實相』といふ、あらゆる物の眞實の相が吾等の心に映るといふのであります。實に私共は羞かしいことであつて、凡夫でありますから、自分の勝手な心持が心の中をあつちへ行つたり、こつちへ行つたりして、始終動かして居る。だから物を見ても本當に見えやしない、物を聞いても本當に聞けやしない佛樣は迷もなければ惱みもないのでありますから、佛の眼から御覽になれば、一切の物の眞實の相が見えるでせう。隨つて吾等も佛の教に親んで、自分の心の迷がだん〳〵薄くなるにしたがつて、一切の物の眞實の相が見える。それをこゝに現はして居るのであります。佛樣の眉間白毫の光がズツと照すといふと、その光の中であらゆる物のあらゆる相が見える、といふことを現はして居るですからその意味で讀んで行くと大體の意味がよくわかります。

佛の眉間白毫相の光が、ズッと東の方の萬八千といふ非常に廣い世界を照した。さうして『周徧せざること靡し』で、どこまでもみなハッキリと見えた佛樣の智慧を正徧知と申します、これはモウ少し讀んで行くとお經の本文の中にも出て來ますが、佛樣は正しく徧ねく知るといふ。人間の物を知るといふことの理想は、正徧といふ二字で盡きて居る、正しく知らなければいけない、さうして又徧ねく、すべてに亘つて知らなければいけない。たゞ澤山物を知つて居るといふだけでは、少しも偉いことはありはしない、いろ〳〵な事を知つて居るけれども、結局何だか解らないといふ人が隨分ある。正しくといふのは、その知識が統一を有つて居ること、それが正しいといふことです。統一を有つて居つて、さうして一切の事をスッカリ知る、これが正しく徧ねく知ることであつて、それが佛の智慧である。いろ〳〵の事を知つて居るけれども纏まらないといふのでは

困る。それから統一は有つて居つても、狹くてはいけない。正しく纏まりがあつて、さうして徧ねくすべてに亘つて知る、斯うなれば本當の智慧であります。

その正徧といふことを別のことばで『妙』といふ。佛の智慧を『妙智』といふ。妙といふことは要するに正徧といふことです、妙といふ字は、何か說明の限りにあらず、といふ風に考へられてしまふのですけれども、妙を分解すれば正徧となる。正しくしてすべてに行き渡ることです。妙法といひ、妙智といふのはみなそれです。佛はさういふ風に正しく統一を有つて、さうしてすべてを知つて居られる、それをこゝには『周徧せざること靡し』といつてあります。どんな事でも佛樣の智慧の光に照されゝばスッカリわかる、わかるけれども、たゞわかるだけではない、それがチャント統一を有つてわかつて來るのであります。

下は阿鼻地獄に至り、上は阿迦尼吒天に至る。

（下至二阿鼻地獄一、上至三阿迦尼吒天一）

「阿鼻地獄」といふのは所謂無間地獄で、地獄界の一番下のところとされて居る。それから「阿迦尼吒天」といふのは有頂天と譯します、形のある世界の一番上だといふやうに考へられて居る。形のない、からだを持たないで魂だけで生きて居るものもあるやうに考へられて居るのですが、さういふ世界はしばらく別に致しまして、形のあるものゝ住んで居る世界の一番上が有頂天だと考へられて居る。ですから下は阿鼻地獄に至り、上は有頂天に至るといふのは、つまり世の中のあらゆる境界あらゆるものゝ存在する狀態が、スッカリその佛の光に照されて見える、といふ意味であります。

此の世界に於て盡く彼の土の六趣の衆生を見。

（於二此世界一盡見二彼土六趣衆生一）

「彼の土の六趣の衆生」といふのは、吾々の住んで居る此の世界よりほかのいろ〳〵な人間の生活狀態を見ることが出來た。そのいろ〳〵な人間の狀態といふものを、細かく言へばいろ〳〵あるでせうがそれを概括して言ふと六趣といふ、六いろの生活狀態になる。

チョウド好い機會ですから、此の際に一通り申して置きたいと思ひますが、「六趣」といふのは六道といふも同じことです。これは敎とか道とかいふものを知らない者の生きて行く世界です、敎を學び、道を求むれば別の世界が開かれますけれども、敎も道もナニも知らないで、普通に生れたまゝで生きて居る人間の生きて行く世界は、六種しかないのであつて、それを六趣とも六道ともいふ。細かく言へば限りがないでせう。その人〳〵に依つてみな違ひませう。けれども概括して言へば、吾々凡夫の生きて居る世界といふものは六種しかない、その六つの世界をあつちへ行つたり、こつちへ行つたりして居る

といふのです。その六つといふのは

地獄
餓鬼
畜生
脩羅
人
天

でありますが、或はこれに「界」の字をつけて、地獄界、餓鬼界、畜生界、脩羅界、人間界、天上界（これは人界天界では少し語呂が惡いから、界の字をつけるときには人間界天上界といふ）とにかく六つの世界がある。

もつとも佛敎の中にも眞實の敎と方便の敎とがありますから、その方便の敎で言ふと、印度の昔からの傳說をそのまゝに採り用ひて、地獄界は地面の底に在る、といふやうにも言はれて居る。經典の中にもさういふことがあります。八寒地獄とか八熱地獄とかいつて、地面の底にさういふ地獄があると言つてありますが、現代のやうに科學的知識が進んでは、誰もそんな事は信ずる者は無いでせう。地面をいくら掘つてもそんなものは出て來やしない、だん〳〵掘つて亞米利加まで掘り貫いても出て來やしない。そんな事を信ずる者は無いでせうが、しかし方便としてはさういふことを說かれて居ります。ところが大乘の佛敎に入つて、一切の世界は人間の心で造られるものだと說かれて後は、この六つの世界といふものは吾々お互ひの心の中に實現するものだ、といふ風に言はれて居る。それは眞實の事でせう、地獄も餓鬼も、畜生も脩羅も、何も彼もみなお互ひ人間の心の中に實現されるのだ、と言はれて居る。その事が、佛の眉間から光がパッと出た、その光の中でハッキリ判つたといふのです。換言れば吾々が佛樣の敎を信じて、自分の心の智慧が明かになつて來ると、そんなあらゆる世界の狀態がハッキリと判る、斯ういふ意味に解して宜しいでせう。

支那では天台大師といふ人がいろ〳〵お經を研究して、殊に法華經といふものを根本から研究しまして、さうして此の六つの世界といふものは、全く吾々の心の中に現はれて來るのだ、といふことをハッキリと言つて居ります。それを摘んで申しますと地獄界といふのは「瞋恚」（いかり）の世界である吾々の心の中に瞋恚といふ心持が一たび崩しましてその瞋恚の心持が吾々の心の全體を占領してしまつて、他の考は少しもそこに起る餘裕がなくなつた時に、吾々の心の中に地獄界が實現される、斯う言はれるのであります。瞋恚といふものは、人間の煩惱の中で一番大きいものです、いろ〳〵の煩惱があるけれども、その根本の一番惡い、一番人生を破壞する世の中の一切を打ち破る根本の煩惱は瞋恚であります。これほど恐ろしいものはない、瞋恚といふものはどうして起るかといへば、一番はじめは、自分と異ふものに對して不快を感ずるといふ所からおこる。これはどうも吾々の我儘です、自分の今までやつて居る事と少し異ふものが出て來るといふと、何だか氣持が惡い。はじめはチョットした事ですがだん〳〵それが大きくなつて行く。自分が饅頭が好きなのに、人が酒を飲むと言ふと氣持が惡い、自分が酒が好きなのに、人が團子を食ひたいと言ふと氣持が惡い、といふのは普通の人情ですが、それがだん〳〵大きくなつて行けば、所謂瞋恚といふものになつて行く。

はじめは我に逢ふものに對して不快を感ずる私共は東京で育つたものですから、東京の言葉を使ふ此の頃は大分旅行をしまして、方々の國の言葉などを覺えたから何ともありませんが、はじめ旅行をした頃には、他所へ行つて逢つた言葉を聞いた時に、こんな不愉快な事はなかつた。言葉などゝいふものは、別に何處の言葉が標準になるといふ事はきまりはしないでせうけれども、私共は東京で育つたもの

ですから、東京の言葉が標準だと思つて居る。さうすると違つた言葉を使はれると氣持が惡い、京都や大阪へ行つて、買物でもするときに、斯ういふ物は無いかと言ふと「あらへん」と言ふ、無いなら無いと言つたら宜ささうなものだ「あらへん」などと變な事を言ふナと思つて、モウ氣持が惡い、それから肥後の熊本あたりへ行つて、店で買物をする、「お前の所に斯ういふ品物は無いか」「ござりまつしえん」と言ふ。無いなら無いと言へば宜い、「まつしえん」などと强く言ふ、どうも氣持が惡い。言葉一つでも自分の慣れない言葉に出會ふと非常に氣持が惡い、人間はさういふ我儘な心持を持つて居ります

それがだん〳〵嵩じて行くと、所謂瞋恚といふものになつて、自分と違つたものをすべて仇敵とするといふことになる。ですから老人の眼から見ると、若い者はみな生意氣に見える、若い者から見ると、老人はみな頭腦が舊いやうに見える。違つたものを

包容するといふことが出來なくなつて來る、それが所謂瞋恚といふものです。その瞋恚の心持が一たび自分の心を占領してしまひますと、モウ周圍がみな仇敵です。人間が孤立してしまふ。親でも子でも、女房でも友達でも、自分が本當に腹を立てた時にはみな仇敵です。これは實に淺ましい事です。人間はみな一緒に住まなければならぬ本性を有つて居るのに、その本性をまるで失つてしまつて一切を仇敵とする。その心持が地獄界です。針の山とか、血の池地獄とかいろ〳〵言ふのは、みな自分の心の中に在る、周圍をみな敵にする、だから自分の生きて居る事が意味が無くなつてしまふ。周圍中がみな自分を窘めるものゝやうに思ふ、それが地獄界です。

それから餓鬼界といふのは「貪欲」が本になる。貪るといふ心持が吾々の心の中をスツカリ占領してしまつて、他の心持が少しも起る餘裕が無くなつた時に於て、吾々の心の中に餓鬼界が出現される、と

いふ風に言はれるのであります。貪るといふ心持は金が欲しいとか、位が欲しいとか、地位が欲しいとかいふやうな事ばかりではない、一切の人が自分の爲に生きて居ると思ふこと、それが貪るといふことの根本です。周圍の者はみな自分の爲に生きて居ると思ふ。だから人がどれほどの事をして呉れても氣に入らない、モツと何とかして呉れさうなものだと思ふ。親は自分の親だから、自分だけを可愛がつて呉れさうなものだと思ふ。子供は自分の子供だから自分にだけ孝行をして呉れさうなものだと思ふ。友達は自分の友達だから、自分にだけ親切にして呉れさうなものだと思ふ。一切の人がみな自分の爲にあるやうに思ふ。それが間違です、人間はお互に相倚り相扶けて居るものですから、自分の爲にばかり在る筈はないのですけれども、さう思つてしまふ。電車までも自分の爲の電車だと思ふ、だから滿員だと腹が立つ「何だつて腰を掛けるところが無いだらう」と言ふ、そのくせ片道七錢しか拂つて居ない。これもやはり自分一人の爲の電車のやうな氣がするさういふやうな事でも、みな自分の爲に在るやうな誤解をして居ります爲に、何でも氣に入らない。人がどんなに親切にして呉れても、モツとして呉れゝば宜いと思ふ。人がどんなに自分の爲に都合好くして呉れても、モット〳〵と求めて滿足が無い、それが所謂餓鬼界です。斯ういふ心持を持つて居れば人間は不幸です、周圍中がみな物足らないのですから非常に不幸なことです。

私は神田の方の或る學校へ教へに行つて居ります が、私の家は新宿の少し奥の方ですから、小川町から新宿行といふ電車に乘つて歸ります。ところが小川町で電車を待つて居ると、なか〳〵新宿行が來ない、青山行が來たり、早稲田行が來たりして、どうも新宿行が來ない。それから不平を起して、「どうもこれは電車の分配の仕方が惡い、一つ電氣局へで

も文句を言つてやらうかナ」と思つた。ところがモウ一人三宅坂の近邊に住んで居る私の友人があるのですが、その男が言ふには、「どうも小川町の所は青山行がなか〳〵來ないナ」と言ふ。私は、新宿行が容易に來ないと思つて腹を立てたところが、その友人は「イヤ青山行が來ないで、新宿行などばかりむやみに來ていけない」と言ふ、これは少しおかしいと思つた。それからその友達と二人で相談して、「僕は新宿行が來ないで困ると思つて居つたら、君は青山行が來ないで困ると言ふ、それではお互に一つ調べて見ないか」といふので、隨分物好きな話ですが、一週間ばかりの間、どれが一番餘計に來るかと調べて見た。すると新宿行が一番餘計に來るのです。私はスッカリ閉口してしまつた。どうも人間といふものは我儘なもので、新宿行に乘らうと思ふとサッパリ新宿行が來ないやうな氣がする、青山行に乘らうと思つて居る者は、青山行が容易に來ないやうな氣がする。調べて見るとナーニ新宿行が少いわけでも何でもない、一週間調べたら新宿行が一番餘計に來た。さういふやうな事があるのであります。

斯ういふ風に何でも自分の都合を中心として、多くを外に求めるといふ心持がある、これは淺ましい事でありますが、凡夫としては免れないことでせうそれがあるから何でも滿足しない、これが餓鬼界であります。腹がへつて、いくら食つても足りないでモッと呉れ〳〵と言つて手を出して居るのが餓鬼だといひますが、さういふ狀態を萬事に就てやつて居るのです。それで貪る心持が自分の心の中をスッカリ占領したときに、餓鬼道が出現するといふのであります。

それから畜生といふのは「愚痴」です、愚痴の心持が自分の胸をスッカリ占領したときに、そこに畜生界が實現されると申します。愚痴といふのはどういふ事かといふと、眼の前の所だけ見て前後を見ないことです。どうも吾々は眼の前の事ばかりを見る物は決して偶然に起つて來るものは無いのであつて起るべくして起り、消え去るべくして消え去るのであつて、一切が極めて複雜な因果の關係に依つて行はれて居るのであります。ところが兎角にさういふ事を考へませんで、眼の前に起つて來た事ばかりを見て、それが良いといふと喜び、それが惡いといふと腹を立つといふやうな心持、所謂眼先流の考、これが愚痴であります。これも私共凡夫に取つては免れないことでありますが、どうも眼の前の事だけでやる。

私はいつでも電車に乘つてサウ思ふのですが、電車が停電するときつと車掌に文句を言ふ人がある。「オイ車掌、どうした、いつまで停電するのだ」と言ふ、車掌がナニも電氣を停めて居るのではない、電氣はズッと遠くの方で停つて居る。それを眼の前の車掌を相手にして「オイ車掌、どうするのだ」と言つて居る、どうすると言つたつて、車掌はどうにも出來やしない。さういふやうに遠くに原因のあることを考へないで、眼の前の事ばかりを考へて、それで喜んだり、悲しんだり、騒いだりして居るといふことが所謂愚痴です。淺ましい事ですが兎角に人間はサウなり易い、寒いといふと急に周章て見たり暑いといふと急に驚いて見たりするといふやうな事が始終あります。その愚痴の心持が人間の心の全體を占領したときには、モウ人間でなくしてそれは畜生界がそこに出現するのだ、斯う言はれるのであります。

それから脩羅界、これは誰でも知つて居るやうに脩羅の爭ひと申します、お互ひに爭ひ合ひ、鬪ひ合ふものゝ代表として脩羅といふものが考へられて居りますが、爭ひをおこす根本は何であるかといふとそれは人間に「諂曲」といふ心持がある、諂曲といふのはこぢつけ、といふこと、モウ少し言ひ換へれ

ば自分に都合の好いやうに解釈するといふことです。諂は人にへつらふよりも、自分で自分にへつらふことで、自分に都合の好いやうな考をおこして、さうして正しい道理を曲げてしまふ、それが諂曲であります。吾々は始終それをやつて居る、何でも自分に都合の好いやうに解釈する、それで言譯をうまく考へる。斯ういふ會などでも遲れて來る時には、「私が遲くなりました」と言ふ人はありはしない、「電車が停電しまして……」「出掛けに客が來まして……」何とか言つて自分に責任を負はせない、人に押つけてしまふ。「どうも時計が狂つて居たものですから……」狂つた時計などを持つて居るのは自分が惡いのですけれども、サウは言はない「電車に事故があつて江戸川の交叉點で大分長い間停つて居りましたので……」いろ〳〵な事を言ふ。さうして自分で責任を負ふといふことをしないで、責任を他に負はせる。都合の好いやうな解釈をして都合の好いやうな説明をする、斯ういふのが人間の癖です。お互にそれをやつて居る、だから喧嘩の絶間がない。此方は此方で自分に都合の好いやうに解釈をし、彼方は彼方で自分に都合の好いやうに解釈をするから、そのお互ひの解釈といふものは必ず衝突するにきまつて居る。それが極端まで行けば脩羅の爭ひといふことになる。互ひに爭ひ合つて果しがない。銘々が小さい自分を固執する。その固執することを捨てゝしまへば宜いけれども、自分といふものを固執して、互ひに三角の眼をして睨み合つて居る、これが脩羅界です。

それから人間界、これは「平正」と申して、前に擧げたやうな四つの心持はあるけれども、それが少し落着いたところが人間です。腹は立てるけれども地獄に墮ちるほどにはならないで我慢する、いろ〳〵な物も欲しがるけれども、先づ餓鬼にならないでいゝ加減なところで踏み止るといふのが、普通の

人間の世界です。まア私共はそれをやつて居る、電車の内で人に足を踏まれゝば「此の野郎ッ」と言ひたくなるけれども、「佛教の話をした歸りがけだからそれもチト見つともないナ」と思つて我慢して默つて居る。銀座通りを歩いて葉口の膨れたのが落ちて居れば、チョット拾ひたくも思ふけれども、人が見て居るからまア拾はないで、手はムヅ〳〵するけれども其の儘見て通る、といふやうな事をみなやつて居る。だからいろ〳〵な煩惱はおこるけれども、その煩惱を抑へて割合に平穩な狀態に戻つて來たところが人間界です。

これは誠に言ひにくい事ですけれども、皆さんはどうお考へになりますか、世の中の惡人といふものをそんなに攻擊することは、吾々には資格が無いのではないか、斯う私は此の頃ック〳〵思ひます。何故なら自分達もその近邊まで行くのですから……。けれどもまア後へ引返すだけの所はあるのですが、實を言ふと危ないものです、誰かゝ賄賂を取つて牢屋に入れられたといふやうな新聞記事を見ると「此奴怪しからぬ奴だ」と言つて憤慨するけれども、しかし其の賄賂を取つた人と吾々とが、そんなに非常な距りがあるかどうか。現に私などは一度も賄賂を取つたことがない。しかし考へて見ると誰も一度も持つて來た事がない。持つて來なければ取らないのは當然で、チッとも偉いことはありはしない。さういふやうな事が幾らもある、自分が罪を犯さないからといつて、人の罪を犯したのを非常に憎むけれども、持つて來なければ賄賂の取り樣がない。「乃公は儉約して居る、偉いだらう。と言つても、收入が少なければ誰だつて據ろなく儉約をします、ナニも偉い事はありはしない。「乃公は徒歩主義だ」ナンと言ふ人がある、主義でもナンでもありはしない。自動車に乘る金が無ければ仕樣ことなしの徒歩主義になる。「乃公は菜食主義だ」と言ふ人がある、

魚を買ふ金がなければ據ろなく菜食しなければならぬ、ナニも偉い事はありはしない。だから自分の心を考へて見ないで、たゞ形の上に於て過ちがないからといつて、スグに惡い人間を罵つて、彼と我とは段が違ふなどゝ思ふのは、それはトンでもない間違であります。吾々は幸にして、いろ〳〵な間違が起るけれども、その煩惱の極端に行かない間に踏み止まるだけのものである。斯うやつてお互に平氣な顏をして向ひ合つて居るけれども、人間といふものは危いものである。地獄に行きさうになつたり、餓鬼に行きさうになつたりしては、危いところでヒョッと止まる。止まるからまア普通の人間で居られるのでせう。そこの所を考へなければいけない。

それから天上界、これは「歡喜」の世界とされて居ります。歡喜の心持が胸を一パイ滿して他の心持が起きない、それこそ天に上つたやうな、人間界の地面を離れたやうな氣分にもなります、それが天上界であります。印度の昔、佛敎の起らない前の印度に於ては、天に生れるといふ理想がありました。これは婆羅門と申しまして、佛敎のおこる前に、九十五種とか九十六種とかいふいろ〳〵な派がありましたが、それ等の婆羅門の大體の考は、此の世に於て苦勞をすれば來世は天に生れることが出來るといふことが理想であつた。天に生れゝば人間界の苦勞はなくなる、だから此の世に居る間に難行苦行をする、或は斷食をするとか、夜寢ないで修行をするとかいふやうなことをやつた、その目的は、みな此の世に於てさま〳〵な苦しい思ひをして、その報ひとして來世は天上界に生れるといふことであつたやうです。

ところがお釋迦樣が御出現になつて、その考を根本から打破られた、そこが非常に尊い事です。お釋迦樣のお考では、苦勞が無いといふ事が何で有難いか、吾々は忙しいから、閑散になれば宜いと思ふけれども、閑散になつて何にもしないで居つたらつまらない。ナニも苦勞がない、ナニも心配がないといふ狀態は少しも羨むべき狀態ではないのであつて、それは苦しい時から苦しまない狀態に移つた當座は有難いだらうけれども、何にも用事の無い有樣が續けばつまらなくなつて來る、ヤハリ何かしたくなつて來る。だから天上界といふものはチッとも幸福なものではない、人間といふものは生きて居るのだから、生きた身を持つて、生きた心を持つて居る以上は、生きて動きたいといふことは人間の本來の要求である。だから苦勞が無いだけでは決して滿足はしない、自分の生きることが何等かの意味があつて、何等かの價値があつて、生きるらしく生きることが出來てはじめて、人間は滿足するので、決して苦勞のないといふ事だけで本當の滿足は得られないのであります。だから苦勞の無いといふ狀態が永く續けばやはり不滿を感じて來る、天上界から地獄界餓鬼界にやはり逆落しをする、斯ういふことをよく佛敎の方では敎へられて居るのであります。

とにかく普通の人の生活狀態に於ては、此の六つの世界が代る〳〵に心の中におこつて來る、それを離れることが出來ない、といふ風に言はれて居ります。道も敎も辨へないで、たゞウッカリ生きて居れば、この六つの世界が代る〳〵に胸の中におこつて來る。だから六道に輪廻すると申します、チョウド車の輪の廻るやうに、グル〳〵廻つて歩いて居る非常に腹を立てゝ地獄界のやうな心持になつて見たり、欲しい〳〵と思つて餓鬼のやうな心持になつて見たり、それから人と喧嘩をして脩羅のやうな心持になつて見たり、また少し落着いて普通の人間になつたり、嬉しい事があつて天上界に上つたやうな氣になつたり、それが又久しく續かないでまた腹を立てゝ地獄へ行つたり、この六つの世界をグル〳〵廻つて居る、これを六道に輪廻すると申します。それ

が所謂凡夫の境界です。佛が世の中に出て教をお説きになりましたのは、要するに此の六道に輪廻する吾々を、輪廻の狀態から救ひ上げたいといふ大慈悲からである、といふ風に考へられるのであります。

それで「六趣」と「趣」といふ字を書いてあるのは、それは自分の心の持ち方でいつでもそこへ行くから趣といふ字を使つてある。心に依つて趣く所である。他所から與へられるのではない、自分の心の持ち方に依つて、自然に瞋恚の心持をおこせば地獄が出て來る、貪る心持が非常に勢力を得ればそこに餓鬼界が出て來るつまり自分の心の持ち方に依つて趣く所だといふので、趣といふ字を使つてあります。

「彼の土の六趣の衆生を見る」といふのはそれを言つてある。佛の智慧の光に照されて、吾々が、六道に輪廻する人間の相の淺ましいぞといふことを、目の前に見るのであります。自分がそこにる居のだけれども、自分の事はわからない、他の人間がさういふ淺ましい狀態に居るといふことを、マザ〳〵と目の前に見るのであります。

又彼の土の現在の諸佛を見。

（又見二彼土、現在諸佛一）

これは後の方便品にいたつて更に詳しく説いてありますが、佛樣といふものは二種あるのではない、佛陀といふのは覺者といふ意味で、覺つた者といふのは絶對の眞理を體得して居るといふ意味であるから、佛樣が幾人出られても、佛樣の覺られた事は一種でなければならぬ。二種も三種も覺りがあつたのでは覺りといふものゝ價値はない譯です。覺る途はそれは其の人の境遇、事情に依つていろ〳〵違ひます、またその覺つた道を説き示す方法は、其の場合其の相手に依つて違ひます、しかしながら覺り得たその絶對の眞理といふものに二種あらう筈がない。だから釋迦牟尼佛といふ佛でも、阿彌陀佛といふ佛

でも何々佛といふ佛でも、佛の覺られたその覺りの內容は同じでなければならぬ。それが二種も三種もあるならば人間の數といふものにならない。甲の佛は斯う覺つて居る、乙の佛はあゝ覺つて居るといふならば、それでは人間の絶對に歸依するものにはならないわけです。覺り方は異ふだらう、また覺つた事の説明の仕方は異ふだらうが、しかし覺つた事そのものは萬古に通じて變らないものでなければならぬ。何萬人、何十萬人、何百萬人の人が修行しても結局行く先は一つでなければならぬ、斯ういふ事が考へられる。それだから私共は佛教といふものに對して絶對に歸依することが出來る、絶對にこれを信ずることが出來るわけです。

私共はお釋迦樣の教を信ずる、そのお釋迦樣の教を信ずるといふことは、あらゆる佛の教を信ずることである。何故なら佛は二種ないのですから……。また私共がお釋迦樣の教に依つて自分の身を修めるといふ事は、遠い昔から遠い後の世までのすべての人の手本になる、何故なら人の性質といふものは二種ないのですから……。それで「彼の土の現在の諸佛を見る」此の世界に居つて、他の世界の佛の相が見えるぞといふ、これは何處の世界に何時どんな佛が出ても、お釋迦樣の教と變りはしないといふ意味をあらはして居る。所謂「諸佛同道」諸佛は道を同じうするといふ思想がこゝに出て來て居る。佛といふものはみな道は同じだ、何百何千の佛樣が出ても佛樣のお説きになる道は結局同じである。だから私共はこの娑婆世界に緣の有る釋迦牟尼佛の教に歸依して、これに依つて私共の安心を定めて宜いわけであります。他の世界の佛樣の相が見えるといふことの意味は、さういふ意味であります。

及び諸佛の所説の經法を聞き、幷に彼の諸の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の諸の修行し得道する者を見。

（及聞二諸佛所說經法一。并見二彼諸比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、諸修行得道者一）

また佛樣のお說きになつた經法といふものも、やはり結局歸着する所は同じでありますから、この世界に於て佛樣の敎を聞き、また比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷――この說明は前に申したから略しますが、要するに、佛の敎に歸依するさま〳〵な人の修行する有樣なども、こゝで考へて見ればわかる。また「得道する」その修行に依つて覺りを得るその樣子なども、ほんとうに考へて見ればわかる。

復た諸の菩薩摩訶薩の種々の因緣、種々の信解種々の相貌ありて菩薩の道を行ずるを見、

（復見二諸菩薩摩訶薩、種種因緣、種種信解、種種相貌行二菩薩道一）

「菩薩摩訶薩」といふのは、前に申したやうに、佛樣の心持をもつて自分の心持としたいといふ理想を以て修行するものであります。その菩薩さま〳〵な因緣、さま〳〵な信解、またさま〳〵な修行の相、貌がある、その有樣がスツカリわかる。

これは心の狀態で申せば信解より外はない、信するといふ事と、解するといふ事であります。私共お經を讀んだり、人の話を聞いたりする、まア上の空で聞いて居ればそれ迄の話でありますけれども、ほんとうに人の話を聞く、ほんとうに書物を讀むといふ時に、その話なり、その書物なりが自分のものになつたといふ場合には、どうしてなるかといへば、信と解二とつが揃ふからである。信ずる、あゝ成る程ほんとうだと思ふ、けれども何故ほんとうだか解らないで、たゞ機械的に信じたのではいけない、解する。その意味がわからなくてはいけない。信と解であります。それで涅槃經の中には

信解圓通方爲二行本一。

（信解圓通方爲二行本一）

とある。信ずるだけではいけない、解するだけでもいけない。信ずるといふことだけ考へて居ると所謂迷信に陷る、何でも有難い〳〵と言ふだけで譯がわからなくなつてしまふ。催眠狀態みたいになつてしまつて、何だか譯はわからずに有難いと言ふ、それでは實際活きた世の中に處すべき道は立たない。それから解するといふのは理解することですが、理解しただけではまだ自分のものにならない。譯がわかつたといつても、わかつたのが自分の行ひになるまでには、なか〳〵そこに距離がありまして、解つただけでよいものではない。だから信と解とが圓通するといつて、それが揃つて一つになつて、「方に」といふのはその時にはじめて、それが行ひの本になるのだといふ、これは良い語であります。

それで信心をするといふには、お互に法華經を信じようと思ふのでも、それには二つの道があります生れながらにして法華の家とか日蓮宗の家に生れて小さい時から、親達がお經を讀む後ろに坐つて一緒にお經を讀んだり、題目を唱へたりしたといふやうな人で、信ずるといふ習慣は相當について居る人がある。けれどもそれが何故有難いかわからずに居るといふと、相當な年頃になればその信仰は壞れてしまふ。さういふ人がよくある、私共もよくそんな相談を受けます、老人が言ふには「どうも家の子供は先にはお寺詣りにも一緒に行つて喜んで居つた、一緒にお經も讀んで居つたが、此の頃になると何だか嫌だと言ひ出した、どうしたものだらう、困つたものだ」といふやうな事をよく相談される。それは信ずる事は敎へられたけれども、解する事を敎へられないから、相當の年頃になつて疑がおこつて來ると嫌になつてしまふのです。

露西亞のトルストイが自分の經歷を書いたものを見ますと、トルストイはお母さんが非常に堅固な耶蘇敎の信者であつたので、子供の時から神樣を信じ

て居つたさうです、譯はわからずに信じて居つた。ところが中學校に行つて居つた時に、トルストイは十二、三歳だと言つて居りますが、或る友達と腕を組んで運動場を一緒に歩いて居つた。さうしてその友達に、自分が親から聞いた通りに「神樣は有難いナ」と言つて話した。さうしたら其の友達がトルストイの顏をヂーッと見て「そんなものがあるものか」と言つた。私は露西亞語は讀めませんから、英語に譯したもので讀んだのでありますが、How is it that possible ? 「どうしてそんなものがあるか」とたゞ一言云はれた。その一言でもつて、自分が十何年來築かれた信仰が、まるで大きな土塀が暴風に會つて地面に倒れるやうな狀態で、ドターンと倒れてしまつた。その時からスッカリ自分は無信仰になつたといふことを告白して居ります。これは恐ろしい事です。たゞ習慣的に有難い〳〵と思つて居つてその理窟がわからないから、「そんなものは無いだらう」と言はれると、その一言で崩れてしまふ。だから信ずる習慣でやつて來た人は、然るべき時機に於て解を與へて、その信仰を保つところの理解力を與へるといふことが必要なのであつて、理解しないでたゞ信じて行くといふ信仰は、どうかすると一遍に壞れてしまふのです。

それからモウ一つは理解の方から入つて行くので理窟ばかり言つて居る者はこれはまたいけない、理窟ばかり捏ねて居つて信ずる心持にならない。理窟の上から問題を考へれば考へるほど、新しい問題がまた產み出されて來ますから、いつ迄經つても物にならない。これは又信ずるといふ習慣をつけなければいけない。

さういふ風に、信の方から行つて解といふ土臺をつける人もあるし、解の方から來て信ずるといふ根を植ゑつける人もあります。これが兩方出來れば申分がない、その狀態を信解圓通と申します、信と解

とが揃つて一つになる、さうなつた時にはじめてそこから本當の善い行ひが出て來て、方に行ひの本となるのだと說かれて居ります。

圓通といふのは良い語です、圓といふのは揃ふこと、通ずるといふのは揃つたものが一つになることです。たゞ揃つただけではいけない、例へば「彼處の家では兩親が揃つて居つて幸福だ」とよく言ふけれども、兩親が揃つて居つても始終喧嘩をして居つたらチッとも幸福ではない。揃つただけではいけない、揃つたのが一つにならなければ幸福ではない。だから圓は揃ふこと、通は其の力が通ひ合つて一つになることそこで初めて本當のものになるのです。

私は外國の笑話の本を讀んで非常に面白いと思つたことがある。先生が生徒に割算を敎へて居つた

$\frac{\infty}{\infty}=1$　$\frac{\infty}{\infty}=1$　$\frac{0}{0}=1$

といふやうなことを敎へて置いて、それから生徒に向つて、時に皆さん、一つの林檎を貰つたのと、$\frac{8}{8}$の林檎を貰つたのとどつちが良いですか」と聞いた。一人の生徒が手を擧げて「先生、一つの方が良いです」と言ふ、先生は「あなたは今の割算を忘れましたか、$\frac{\infty}{\infty}=1$ですヨ」「イエ先生、違ひます、林檎を八つに割れば汁が出て不味くなつてしまひます」と言つた。これは生徒の言ふ方が本當です、數で言へば$\frac{\infty}{\infty}=1$だけれども、林檎の場合には一つの林檎を貰つた方が宜い、八つに割つて汁が出たものを貰つたのでは確かに不味くなる。だから揃つたら宜いといふものではない、揃つたものが通じて一つになつてしまはなければいけない。

そこで圓通と申します、信は信、解は解で別々になつて居つてはいけない、信ずる力と解する力とが渾然として一つになつて、自分の心の全體をつくり上げるといふことになつて、初めて本當の信仰、本當の行ひが出來て來るのです。それで「信解」と書いてあるときには、いつでも信と解とが別々になつ

て居つてはいけない、信と解が通じて一つになる狀態でなければならない。

それから「種種の相貌」とあります、これは心に信じて行つて居る事が相にあらはれたところを謂ふ心に思ふことは必ず外に現はれるのでありますからその現はれたところを相貌と申します。

意に思ふことゝ、口に言ふことゝ、身に行ふこと此の三つを身、口、意の三業と申します。これが揃はなければ本當ではない、身に行ひ、口に言ひ、意に思ふ、これがスッカリ揃へば申分がないのでありますが、實際の場合を考へますと、お互にどれかに偏つて居ります。身には相當に行つて居るが、口には言へない人もあります、口先ばかり巧くても一向意にも無い者もあるし、また意に思つて居るけれども、口にも言へない、行ひにも十分現はせないといふやうな場合があつて、此の三つが揃ふことは容易ではない。しかし理想を言へば、身に行ふ事と、口に言ふ事と、意に思ふ事とが揃つて、はじめて本當の信仰生活になるわけです。

そこで吾々が修行するのにどうしたら宜いか。これは三つ互ひ違ひにやらなければいけない。吾々は凡夫であつて佛樣とは大分距離がありますから、吾々の場合に於てはこれを互ひ違ひに見る、例へば、身に行ひさへすれば口にも自然出るし、意にもしつかり落着く、斯うも考へられる。また口に始終善い事を言つて居れば、それが意にも落着くし、身にも現はれる、斯うも考へられる。それから心がしつかりして居れば、口に言ひ、身に行ふ事も自然に善くなる。斯うも考へられます。ですから此の三つを一方に偏ることなしに、絕えず身に行ふ事にも注意し口に言ふ事にも注意し、意に思ふ事には無論氣をつけて、さうして修行して行けば、自ら圓滿なる揃つた信仰的生活が出來るでありませう。それと同時にまた各自に振りかへつて、自分はどつちの方に缺け

て居る所が多いかといふことを、反省しなければならないわけであります。

此の項は、心に思はないで口で言ふのは僞善だ、心に尊敬しないで形だけお辭儀をするのは虛禮だ、といふやうなことを、若い人などが言ひますけれども、さうではない。やはりお互に褌袍を着て胡坐をかいて居る時と、袴をはいた時とでは、自から心持が違ふのでありますから、形の上から整へてかゝるといふ事も必要であります。それはつまり三業を偏らないやうに、身にも、口にも、意にも修行して行くといふことが必要です。

さういふことを考へてこの經文を見ると面白い。いろ〳〵に修行し、いろ〳〵に心に信じ、理解し、またそれが相貌にあらはれる、さういふ有樣を、佛の光の中で見ることが出來たといふのであります。

復た諸佛の般涅槃したまふ者を見。

（復見二諸佛、般涅槃者一）

「般涅槃」といふのは直譯すれば滅といふ意味で、死んでしまふことです。尤も涅槃といふことの意味は深く解釋すれば、死ぬ意味でなくして覺るといふ意味にもなりますが、こゝではサウ解釋しないでよろしい。佛樣が生涯の間教を說いて、說くべき事を說いてしまへば世の中から姿を消してしまふ、さういふ意味にだけ解つてよろしいのです。其の、何故に佛が永久に世の中に居られないかといふことはズッと後に行つて壽量品といふところで說明をされて居ることですが、要するにいつ迄も佛が居るといふことであれば、人間が佛の敎はいつでも聞けると思つて馴れてしまつて、敎をほんとうに聞く心持にならぬ。だから、佛が世の中に生きて居つて敎を說いたといふことも、吾々をお救ひになる慈悲心であるのだが、或る時期になれば死んでしまはれるといふことも、吾々に注意を與へて、佛にはむやみに遇へないのだから、佛の敎を大切にしなければな

らぬぞといふ心持をおこさせる爲である、これも亦慈悲であるといふ風に教へられて居ります。

此の事はお互によほど考へて見なければならぬことだと思ひます。人生に死があるといふことは免れない事ですが、それを免れない事だと思つて諦めてしまふのではつまらない話である。人間は何故死ぬのだらうといふことは、相當に考へて見なければならない事であります。何故といつて死ぬのだから死ぬのだと言つてしまへばそれまでの話である。しかしながら、この法華經のズツと先の方の壽量品に行つてお釈迦様がお說きになつた、その御趣意を考へて見ますと、人間が若し死ぬといふ事がなかつたらどれほど人間は懈け者であるかわからない。現に吾々は懈け者です、今日すべき事を今日しない、今月すべき事を今月しないで、いゝ加減にして居る。それは何故かといへば、いつ迄も生きて居ると思ふからです。日本語にはうまい語があつて「いづれ其の内」と言ふ、いつの事だかわからない。「久しく御無沙汰を致しました、いづれ其の内伺ひます」……いづれ其の内といふのは、明日だか明後日だか、一年後だか五年後だかわからない。さういふうまい語を始終使つて居る、さうして今日すべき事を今日しない。それはまだ今日死にはしないと思ふからです。私なども佛教を學び始めてから二十年ぐらゐになります、何時死ぬかわからぬ位の事は知つて居ります今晩死ぬかも知れないといふ事は知つて居る。知つて居りながら、やはり「まさか……」と思つて居るそれでいろ〳〵な約束をする。私は明日午後に或る友達と會つて御馳走になる約束をして居る、たしかに明日まで生きて居ると思つて居る。それだから今日すべき事を今日しない。後で何とか出來ると思つて居る。ところが死といふ事を目の前にマザ〳〵と見せられた時には、成る程人生は儚ないものだナ、何時死ぬかわからぬのだから、與へられた今日の一日を無駄にしてはならないといふことを、心から考へるのであります。だから死といふ事は、吾々に大きな教訓を與へるのです。

また人と交際ふ場合に於てもさうでせう。今晩この人と死別れをすると思つたら、私はその人に對して無理は言へない。いづれ又會ふと思ふから無理も言ふわけです。兄弟喧嘩をするとか、夫婦喧嘩をする、まさか永久に敵になるつもりで喧嘩をするのではない、「ナーニ後で大概向ふから謝つて來るだらう」……多寡を括つて喧嘩をして居る。ところが例へば夫婦で今晩喧嘩をして別々に寢てしまつて、翌朝眼が覺めて見たら亭主が死んで居つた、細君が死んで居つたとしたら「あゝ昨夜あんな言ひ爭ひをしなければよかつた」とツク〳〵思ふでせう。兄弟などでもさうです。私などは自分の弟に小さい時に死別れたのでありますが、弟が死ぬ前の晩に私は喧嘩をした、繪紙の奪ひ合をして、私は兄貴だから繪紙を取つてしまつた。弟は泣いてしまつて、泣寢入に寢てしまつた。ところが翌朝になつたら弟は死んでしまつて居る、「あゝ昨夜泣かさなければ宜かつたナ、繪紙を取らなければ宜かつたナ」と思つて、私は九歳の時のことですが、今でも想ひ出すと心が痛むやうに思ふ。私はいつでも子供達に言ふのです、斯ういふ事があるのだゾ、私は經驗したのだが、弟と喧嘩をして、弟は泣いたが、その晩死んでしまつたのだ、何と後悔しても追付きはしない。それはつまり死ぬといふ事を知らないからです

けれどもお互にわからんではありませんか。斯うやつてお互に顏を合せて居る者が、誰か今晩死ぬかも知れないではありませんか。その時にどうでせう吾々は後悔がないでせうか。自分の親が明日死ぬと思つたときに、どうでせう、今日自分の親に事へるつかへ方が何處か足りない所はないでせうか。自分の女房が今晩死ぬとなつた時に、明日の朝起きて見

て「モウ少し優しくしてやれば宜かつた」といふ後悔がないでせうか。さういふ事を考へなければいけない。人生は無常ですから、いつでも、今晩死に別れても、今此處で死んでも後悔のないやうにして、お互が親子、兄弟、夫婦、友人の間に交際つて行かなければ、後で取返しがつかないのです。斯ういふことを本當に考へなければいけない、私共は幾度も後悔して居る、今まで五十何年の間、いろ〳〵の人に死別れて居りますが、死別れて見ると「あゝこんなに早く死別れるくらゐなら、生きて居る間にモウ少しあゝもしてやつたら宜かつた、斯うもしてやつたら宜かつた」といふことを考へるのであります。そのことを、死といふ事に依つて吾々は教へられるのです、だから何時死ぬかわからぬといふことを、いつでも考へなければならぬ。日蓮聖人が、先づ臨終の事を習うて然る後に生きて居る間の事を習へと仰しやつたのは其の事です。何時自分が死んでも、

何時他の人が死んでも後悔のないやうな生き方をいつでもしろ、斯ういふことであります。これは本當に考へなければならぬ事です、さうして若し人生に死といふ事がないならば、そんな事は考へられはしませぬ。

だから死んで行く人は、自分が死ぬことに依つて生きて居る者に、「お前の惠まれた今日の一日を無駄にするナ、此の一日をつまらなく過すな」といふことを教へて、自分が死んで行くのですから、私共はこの死んで行く人に對して、たゞそれを悼むだけではない、心から感謝してその跡を弔ふといふ心持になるのです。大正十二年に大地震が東京を襲うて何萬の人が死んだ、その大正十二年の震災に依つて訓へられて、道路も廣くなつた、橋も堅固になつた家もいろ〳〵丈夫に出來て、今度あんな地震が來たつてあれほどの人が死にはしないでせう、さうすればあの地震に依つて吾々は教へられたのですから、

あの地震に依つて死んだ人は、自分達が死んで、生き殘つた私共に用心をしろといふ教を與へて呉れた人である。だから私共は、地震で死んだ人に對してたゞ氣の毒だと思ふだけではない、心から感謝して其の跡を弔つて宜い、斯ういふことになるのであります。

人生の死といふものをさういふ風に解釋すると、死といふ事が意味を有つて來る。子供が生れてすぐ死ぬことがあります。私なども生れて三週間經つた子供に死なれた事がありますが、その時分には私も佛教のことをあまり考へない時でしたから「何だつて此奴は生れて來たんだ？すぐ死んで行くくらゐなら生れなければ宜かつたのに、馬鹿々々しい奴だナ」と思つて居つた。けれどもよく考へて見れば、生れてすぐ死んで行つたその子供が、親父に對して「その生きて居る一日を無駄にするな」といふ大きな教を與へて死んで行つて呉れたのですから、その子供に對しても親父は感謝してよいわけになる。いろ〳〵さういふ意味を考へて行くと、死といふ事の解釋がしつかりと附くわけであります。

佛樣はさういふ意味で八十歳で死んで行かれたのです。いつまで生きて居るよりも、自分がこゝで死んで行けば、お前達は佛には遇ひ難しと考へて、佛の遺した教を眞實に修行するであらうから……、斯ういふので佛樣は死んで行かれた。それが佛の涅槃といふことの意味です。佛樣ばかりではない、吾々はすべての人の死といふものに出會つたときに、さういふ風に死といふものを解釋するのです。さうして生きた吾々がとかく懈け者で、懈怠の心持が起き易くていけませんから、これをいつでも戒めるといふことにしなければならぬのであります。

非常に横道の話が長くなりましたが、さういふわけでこゝに佛の涅槃して行かれる有樣も目の前に見ると言つてあります。

復た諸佛の般涅槃の後、佛舍利を以て七寶の塔を起つるを見る。

（復見二諸佛般涅槃後、以二佛舍利、起二七寶塔一）

舍利といふのは骨のことで、佛樣がなくなつた後に、佛樣のお骨をそこへ埋めて、さうして七寶を以て飾つた大きな塔を起てたすがたも見るといふ。この「塔」といふ字は、今ではこの字を見ると大きな丈の高い建物のことを想ひ出しますけれども、塔といふ字にそんな意味はないのです。これはたゞ印度の發音をあらはしただけのことで、この字に高い建物といふ意味はありません。印度の梵語では實は「塔婆」といふのです、それが今では塔と塔婆と二つになつてしまつて、塔婆といふと、お墓のうしろに薄つぺらな木で拵へたものを建てる、あれを塔婆といふ。けれども元來塔は塔婆といふ字で、あゝいふ大きな塔を建てる代りに、手輕に薄い板で拵へたものを建てるわけで塔と塔婆は意味は全く同じであります。その塔婆といふ意味は、支那の語に譯すると高顯と譯すので、高く顯はれたものといふ意味です。

高く顯はれたといふのはどういふ意味かといふと亡くなつた人の德を世の中に顯はすと共に、その亡くなつた人の教を自分達が永く承け繼いで行かうといふ心持をあらはすのです。塔を建てるといふ事のほんとうの意味はそれです。だから塔には必ず鈴をつける、これは鈴の音が四邊に鳴り響くやうに、その亡くなつた人の精神が世の中に傳はつて、大勢の人を教へ導くやうにといふ意味を寓して鈴をつけるので、たゞ裝飾ではない。例へばお釋迦樣の爲に塔を建てれば、お釋迦樣の德を顯はすと共に、お釋迦樣の教を吾々が必ず守つて行かうといふ誓ひの意味です、これが塔を建てるといふことに現はれて居るわけです。或は自分の恩を受けた人とか、自分の先祖の爲とか、どこにかく仰ぎ慕ふ人のために塔を建て

るといふ習慣が印度には舊からあつて、支那にも日本にも傳はつたのでありますが、みなさういふ意味で、その亡くなつた人を記念すると共に、その亡くなつた人の心持を世の中に弘めて世間を益したい世間の役に立ちたい、斯ういふ意味で塔を建てるのであります。たゞ塔だけ建てゝも仕方がない。それで佛がなくなつたらば、佛の舍利の上に塔を建てるさうして永遠に其の佛の教を記念するのであります。

こんなやうなすがたを、お釋迦樣の眉間から出た光の中で明かに自分の目の前に見たといふことは、佛の智慧に照されて吾々の心が明るくなるといふとこれ〳〵の事がみなわかつて來るといふ意味であります。

そこで今度は、彌勒菩薩が此の事の說明を求めることになつて來る。お釋迦樣が靜かに考へて居らつしやる間に、人々の心に斯ういふやうな不思議な心持がおこりましたから、彌勒菩薩はみなが斯ういふやうな不思議な心持をおこしたのは何か理由があるだらう、これからお釋迦樣は、今まで默つて坐つて居らつしやるが、吾々にこんな心持をおこさせて置いて、さうして今まで說かれないモッと深遠な教をお說きになるのではないか知らん、といふやうな疑をおこしました。そこで彌勒が文殊菩薩に對してその理由を問ふのであります。

支那の天台大師がこのところを說明して非常に面白く言つて居ります。彌勒は問ふのだ、文殊は答へるのだ、彌勒はなぜ問ふかといへば、自分一人が疑を懷いたから問ふのではなくして、一切の人間に代つて問ふのだから、彌勒が問うたといふことは慈悲の心持から出た。それから文殊が答へたのは、自分が物を知つて居るから其の知つて居る事をみなに示さうと思つて答へたのでなくして衆の心の疑を除きたいと思つて答へたのだから、これも慈悲の心持

から出たのである。だから問ふ彌勒も、答へた文殊も、共に慈悲の心持から出たのであつて、その功德は同じだ、といふことを天台大師が言つて居ります。これは非常に面白い說明です。チョット俗な考で言へば、一人が問うて一人が答へるのですから、問うた人よりは答へた人の方が偉さうに見えるけれども、さうではない。問ふのも衆に代つて問うたので衆に知らせてやりたいといふ慈悲である、答へる方も自分の智慧をあらはす爲ではない、衆に知らせてやりたいといふ慈悲からであるから、問ふ者と答へる者の功德は同じだといふのであります。

此の事は人生のあらゆる事に通ずる解釋であります。世の中を益する、人に惠を與へるといふ心持から出た事ならば、表面に現はれた仕事も、蔭に隱れた仕事も同じ價値である、問ふ人も答へる人も同じである。命令する人も使はれる人も同じである。人生を益する、人間を救ふといふその大目的の爲に役立つ仕事であるならば、大きい事も小さい事も、表面に現はれた事も、蔭に隱れた事も等しく價値がある、齊しく尊さを有つて居る。斯ういふ意味がよくその中に寓されて居るのでありまして、これは佛敎を信ずる者に取つては、しつかりと捉へて置かなければならぬ考であります。さういふ意味でこれから以下の經文を讀んで行きますと、たゞ問答をして居るといふやうなことが、一種の趣きを添へて愉快に讀んで行かれるやうであります。

（第六講了）

記事と敎報

本部團報

「聊かでも日蓮聖人に學ぶ者は、今の時機に憂閑として居らるべきではない、心を同ふせるものは一丸となつて人々に生活の指導原理を與へればならぬと思ふ。徒らに大言壯語しても、重大な危機を叫んでも、何を以ていかに善處すべきかを深い立場から與へられないことは人々をして益々迷途に陷らしむるものではないかと考へる。信仰が形式化したり、學者の講演に止まり、徒に理想に走つたり、又我見に執はれたりしてはさもしいことである、お互に敬虔な態度で上に菩提を求め下は人達に端して行きたい。この一ヶ月本會館に於ける布敎は小林一郎先生の法華經講座連續と毎日曜日の勤行と同師會員の俗の法話並に座談であつた。

五月二十日は知法恩國會と俱に孚賀の本土寺即ち日朗、日像、日輪の各上人御生誕靈場として有名で、そこには日蓮聖人の御眞蹟、「大學三郎殿御書」「諸人御返事」や日朗上人加判の御本尊等其他二三の藤喜御書及び大聖人の御用ひになつた念珠、袈裟、香盒等の寶が新寶藏に奉安されてゐる。夫等を住職山田日眞師の御好意で約百名近くの一團が歡待され、初夏の新綠を滿喫しつゝ、心ゆくばかりに拜觀出來たことは、恰も歲月を忘れて親しく大聖人に面接せる思がして、都塵を一掃し吾等大なる活潑に浴し得た。

横濱敎誌

當地四月中の集りは左記の如くであつた

四日 夜 神奈川篠原町佐藤氏宅。「日蓮聖人と行誡」礒部先生。

九日 夜 礒子區廣地高橋氏宅。小西師、礒部先生、東京より御來濱。

十三日 午後、程ヶ谷區峰岡町平岡氏宅。小西師の御法話。

十四日 夜 中區拜天町伊藤氏宅「利他の信」礒部先生。

十六日 夜 神奈川區桑町石毛氏宅。和賀師の御法話。

二十四日 夜 礒子廣地北山氏宅「聖人の慈と智」礒部先生。

二十七日 夜 神奈川區三ツ澤曙藤氏宅。小西師御來話。

今月二十日會員齋田己代治氏が悲しくもみまかられた。行年六十六歲

法號 顯本院梵行日法信士

南無妙法蓮華經

福島敎信

四月二十八日 福島高商日蓮聖人鑽仰會では學校內生徒集會所で午後一時より新入生歡迎會を催す、每々熱心に御後援下さる統一團福島支部の方々、御多忙中護法の爲めに御臨し下さる。校長先生、吉松先生の御列席を仰ぎ本佛の慈悲の下に信仰の道に勵む學徒達二十餘名集り、河合先生より日蓮主義と國體觀念愛國者日蓮に付き熱烈なる御講義あり深く感銘した、後座談に入り支部より御寄贈の菓子を手にしつ和氣藹々の中に四時半散會す。

同 日 夜 大町一司堂中村樓方にて統一團福島支部例會開催し河合先生は日蓮主義の概觀を述べられ、後座談に題目の見方、人の道會等と話題續出して時の經るのを忘れた。

新加盟者

東京市江戸川區今井町　田村廿三郎殿
同　中野區榮町通　羽下修三殿
（田中道爾氏御紹介）
新潟縣南魚沼郡鹽澤町　高橋大吉殿
濱松市相生町　增井昇殿
東京市芝區三田四國町　竹内文治殿
神戸市葺合區熊内町　舟橋英一殿
（磯部氏御紹介）
靜岡市外用宗　竹内ぎん殿
（福岡駒雄氏御紹介）
福島市柳町　武田常之助殿
同　荒町　山口保治殿
（佐々木伊太郎氏御紹介）

立正門下聯盟

夏期講習會豫告

立正門下各教團有志の主唱に依り來る八月上旬富士山麓本門宗大本山北山本門寺（舊重須談所）に於て門下各教團の統合達成の爲めに日蓮主義夏期講習會を開催することになつた。何卒左記要項御熟覽の上奮つて御入會あらんことを

會規

一、會期　八月二日より五日まで
一、順序　八月二日午前七時新宿驛發同正午身延祖廟前開講式。五日午後二時會場にて閉講式。
一、會場　靜岡縣富士郡北山村、北山本門寺。
一、順路　東海道線富士驛乘換大宮驛下車乘合自動車十五分。
一、講師と講題　本門戒壇思想の復活、文學博士　山川智應先生
富士山下宗門史談　權大僧正　富谷日震師
日本精神と立正大師文學博士　笹川臨風先生
中世紀と日蓮聖人　男爵　井上清純閣下
題未定　陸軍省特派將校
一、雜課　茶話會、討論會、富士五山靈蹟巡拜、寶物拜觀、附近史蹟名勝探勝（自動車巡遊）夜間納涼座談會、其他の清興
尙會期中日興上人日項上人正廟前に法要を行ふ。
一、會費　全期間金拾貳圓五拾錢也　東京、身延、會場、五山史蹟巡拜、講習費等閉講式迄の一切を含む。
中途入會者は講習費一日金五拾錢（但全期は壹圓）宿泊費一日金壹圓通學者食費壹食參拾錢を申受く。
但シ五山巡拜等は實費を申受く講習費は前同樣。
一、申込期日　七月二十日迄。
一、申込所　神田區一橋通十番地
知法思國會內
立正門下夏期講習會事務所
詳細はハガキにて事務所宛御紹介次第案內パンフレットを送る筈。

寄附金維持及團費誌料領收

（自四月二十一日至五月二十日）

一金貳圓五拾錢也　盛岡　金田新兵衛殿
一金貳圓貳拾錢也　福島縣　中島元道殿
一金貳圓　也　富山縣　野上三次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　水野榮子殿
一金貳圓五拾錢也　橫濱　金子光和殿
一金貳圓五拾錢也　東京　田村廿三郎殿
一金拾圓　也　同　津川英吉殿
一金壹圓貳拾錢也　同　三須久三郎殿
一金貳圓五拾錢也　神戸　森岡正男殿
一金貳圓五拾錢也　大阪　小澤珣殿
一金貳圓五拾錢也　濱松　靖井昇殿
一金貳圓五拾錢也　新潟縣　高橋太吉殿
一金壹圓貳拾錢也　靜岡　丹治義山殿
一金貳圓貳拾錢也　橫濱　小泉文柄殿
一金參圓　也　東京　竹内文治殿
一金貳圓貳拾錢也　同　津川英吉殿
一金貳圓五拾錢也　神戸　舟橋英一殿
一金貳圓五拾錢也　大阪　鷲田重政殿
一金貳圓五拾錢也　東京　羽下修三殿
一金五拾錢也　同　日下部二葉殿
一金貳圓貳拾錢也　同　寺澤信平殿
一金參圓　也　千葉縣　平山三藏殿
一金壹圓　也　東京　小峰豊子殿
一金貳圓五拾錢也　橫濱　貝塚敏二郎殿
一金貳圓五拾錢也　東京　大辻松太郎殿
一金五拾八錢也　大阪　山乃神傳道團殿
一金貳圓貳拾錢也　明石　梶川綱太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　富山　岡爲太郎殿
一金貳圓　也　東京　沼部彌太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　千葉　山中保榮殿
一金貳圓貳拾錢也　彦根　奥村三郎殿
一金貳圓貳拾錢也　愛知縣　山本金太殿
一金貳圓貳拾錢也　同　八木東興殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　西田力殿
一金壹圓貳拾錢也　奈良縣　出口馬太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪府　木村祥殿
一金五圓　也　岡山　須山茂三郎殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　木村新夏堂殿
一金拾圓　也　同　井上道太郎殿
一金五圓　也　同　橫山正三殿
一金貳圓五拾錢也　神戸　倉藤喜一郎殿
一金貳圓四拾錢也　釜山　池田金作殿
一金壹圓貳拾錢也　萩　山本光太郎殿
一金貳圓五拾錢也　同　山口保治殿
一金貳圓五拾錢也　福島　武田雷之助殿
一金貳圓貳拾錢也　同　三澤沖江殿
一金參圓　也　東京　大原重雄殿
一金貳圓貳拾錢也　神戸　廣木寬次郎殿

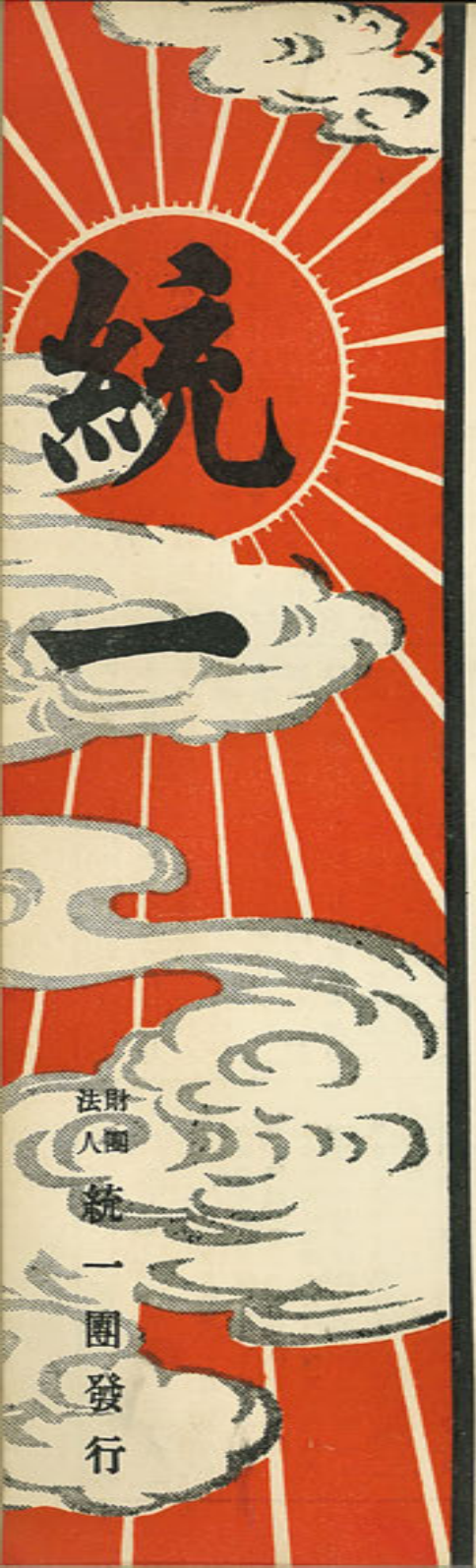
右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

念告

從來本部に於ては正團員も單なる本誌購讀者も同一金額を以て御清授相仰ぎ居申候處彌々時代の趨勢に鑑み愛に本團は　先づ本誌の增大を圖ると共に正團員と誌友とを區別すべき必要相逼り申候に付本誌卷頭略則御諒承の上爲法團爲一切業生可相成團員として何卒御贊助あらんことを偏に希願候

財團法人　統一團



目次

聖訓摘要……日生上人
日蓮教學講座（第十回）……河合陟明
東郷元帥……上田辰卯
法華經講話（第七講）……小林一郎
記事
西の旅……礒部滿事
○團報と教信　○寄附團費誌料領收

第三十九年七月號

本多日生上人名著在庫品特價提供

一聖語錄改版　特價送料共　金壹圓八拾錢
一日蓮主義本領　仝　金貳圓拾錢
一法華經要義　賜天覽　仝　金貳圓五拾錢
一日蓮主義心髓　仝　金壹圓五拾錢
一日蓮主義精要　仝　金貳圓九拾錢
一佛教の本質と其價値　仝　金貳拾五錢
一法華經要品　仝　金五拾錢

礒部滿事謹輯
一本多日生上人　特價送料共　金壹圓七拾錢
一勤行作法　仝　金拾錢

以上施本用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

東京市小石川區音羽町六ノ一七
財團法人 統一團出版部
振替東京九四二〇番

一月刊「教」誌
定價一冊　金拾錢
送料共　一ヶ年前金　金五厘
金壹圓貳拾錢

申込所　東京市小石川區音羽町六ノ一七
「教」發行所
振替東京一〇九四〇番

統一定價
一冊　金貳拾錢　送料壹錢
半ヶ年　金壹圓貳拾錢
一ヶ年　金貳圓貳拾錢　送料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和九年五月廿四日印刷納本
昭和九年六月一日發行
（第四百七十一號）

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼發行人　礒部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所　都印刷所
電話高輪六〇二四番

不許複製

東京市小石川區音羽町六丁目一七
發行所　財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番